太宰府市の文化財　第10集

宮ノ本遺跡 II

——古墳・墳墓篇——

1987

太宰府市教育委員会

宮ノ本遺跡 II

——古墳・墳墓篇——

太宰府市立第三中学校（太宰府西中学校）

建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市が昭和59年度に実施した宮ノ本遺跡の発掘調査報告書であります。

宮ノ本遺跡は、昭和54年度にその一部が調査され１号墓から我国初の買地券が出土し、一躍その名が有名になった遺跡であります。

今回の調査地はその東側にあたり、古墳や窯跡、古代の墳墓など貴重な遺構が発見され、この地域の重要性をあらためて認識させられた次第であります。

なかでも、４号窯跡から発見されました篦書きの文字は、今後考古学や歴史学をはじめとする多くの分野に問題を投げかけるものと思われます。

本書が学術研究や郷土研究の資料として、また文化財に対する理解と認識の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に調査及び報告書作成にあたり、御指導、御鞭撻いただきました諸先生方に感謝申し上げますとともに、猛暑の中を連日調査に参加されました作業員の方々に厚くお礼申し上げる次第であります。

太宰府市教育委員会
教育長　藤　壽人

例　　言

1．本書は1984年度に実施した宮ノ本遺跡（太宰府市大字向佐野字宮ノ本201他所在）の発掘調査の概要である。

2．本書は古墳、墳墓編と窯跡編の二分冊からなる。

3．調査は1984年7月11日から10月12日まで実施した。

4．調査面積は2731.4㎡、開発対象面積は25,000㎡である。

5．宮ノ本遺跡は1979年度に調査された地点を第1次調査とし、今回実施した地点は第2次調査として扱う。遺構番号は第1次調査との統一をはかるため、古墳、墳墓、窯跡については前回の継続番号を付した。他の遺構については下記のように示される。

宮 2 SX 002

①2次（調査次数）　②遺構種別　③遺構番号

6．遺構実測図・測量図及び遺物実測図は、調査担当者の他、岡部大治、山村信榮、狭川麻子、山田富美、亀山隆、岡戸哲紀が行ない、遺構の写真撮影は調査担当者、遺物の写真撮影は岡紀久夫、調査地の空中写真は㈲空中写真稲富によるものである。

7．本書の執筆は調査担当者が分担し、各冊の目次に記した。編集は古墳・墳墓篇を狭川、窯跡篇を山本が担当した。

目　　次

――古墳・墳墓編――

Ⅰ．遺跡の位置……（狭川真一）…2

Ⅱ．調査経過……（　〃　）…5

Ⅲ．遺跡の調査……（　〃　）…8

〔1〕古墳の調査

(1)　7　号　墳……8

(2)　8　号　墳……10

(3)　9　号　墳……12

(4)　10　号　墳……17

(5)　11　号　墳……19

〔2〕墳墓の調査

(1)　5　号　墓……20

(2)　6　号　墓……21

(3)　7・8号墓及び関連遺構……22

(4)　9　号　墓……28

(5)　10　号　墓……29

(6)　火葬施設……29

〔3〕その他の遺構と遺物……（縄文土器・石器は山村信榮）…30

Ⅳ．調査のまとめ……（狭川真一）…34

〔1〕古　　墳……34

〔2〕墳　　墓……35

付篇　宮ノ本1～3号墓、年代の再検討（山本信夫）…41

Fig. 1　主要遺跡分布図（1/40,000　宮ノ本遺跡は21）

Ⅰ．遺跡の位置

大宰府は筑紫平野の南端に位置し、その三方は丘陵に囲まれており、各々の丘陵部には数々の遺跡が展開している。まず北側の大城山（標高410m）には大野城跡があり土塁や石垣、倉庫群といった防衛施設がみられる。奈良時代には大宰府政庁の他、学校院、観世音寺、筑前国分寺、同国分尼寺やそれらに伴う瓦窯が山麓から平野に至る付近に築かれ、平野の狭小部には水城跡が造営されている。中世には岩屋城が中腹に築かれると共に山麓には原山無量寺や観世音寺の子院が点在し、山中には磨崖石塔群も彫られている。東側には大宰府にとって丑寅の方位にあたる宝満山（標高829m）があり、早くから霊峰として信仰を集めると共に中世には修験道の場となり、また山城となった時期もあった。そのため山中には多くの遺跡が見出され、特に上宮祭祀跡は国家的祭祀を思わせるものがある。

大城山から、水城跡で閉じられた狭い平野を越えると宮ノ本遺跡のある低丘陵地帯が広がる。標高50～70mのこの一帯には宮ノ本古墳群や牛頸古窯址群、篠振遺跡の中世墓群が知られている。宮ノ本古墳群は4世紀後半から5世紀前半と考えられているもので今回の調査においても検出されている。しかし未だこの時期の集落が周辺から発見されておらず、宮ノ本遺跡のある丘陵から東へ張り出す低台地上に今後発見される可能性が考えられる。牛頸窯跡群はこの丘陵を含め北は春日市の一部にわたる広大な須恵器窯跡群で、太宰府の一帯は、7～8世紀に生産活動の最盛をむかえる。今までに調査されたものとして神ノ前、向佐野、長浦、宮ノ本、篠振の各遺跡が知られ、未調査のものもいくつか残存している。

奈良時代から平安時代にかけて丘陵部の尾根付近は古代官人の墳墓が展開し、宮ノ本1～4号墓は貴重な発見例である。今回の調査においても墳墓は見出されており、この付近一帯が官人の葬送の場であったことも窺える。

中世では篠振遺跡の土葬墓と火葬施設が顕著であり、宮ノ本遺跡においても火葬施設とみられるものが見出され、中世においても大宰府住人の葬地であったことが知られる。(Fig.1)

こうした貴重な遺跡の展開する丘陵も、日本列島改造計画以来、急激に開発され、今はその大半が住宅地となってしまっている。所々に残る丘陵の残欠も消滅の危機にさらされており、太宰府西郊から緑と文化遺産の消えゆく日が真近に迫りつつある。

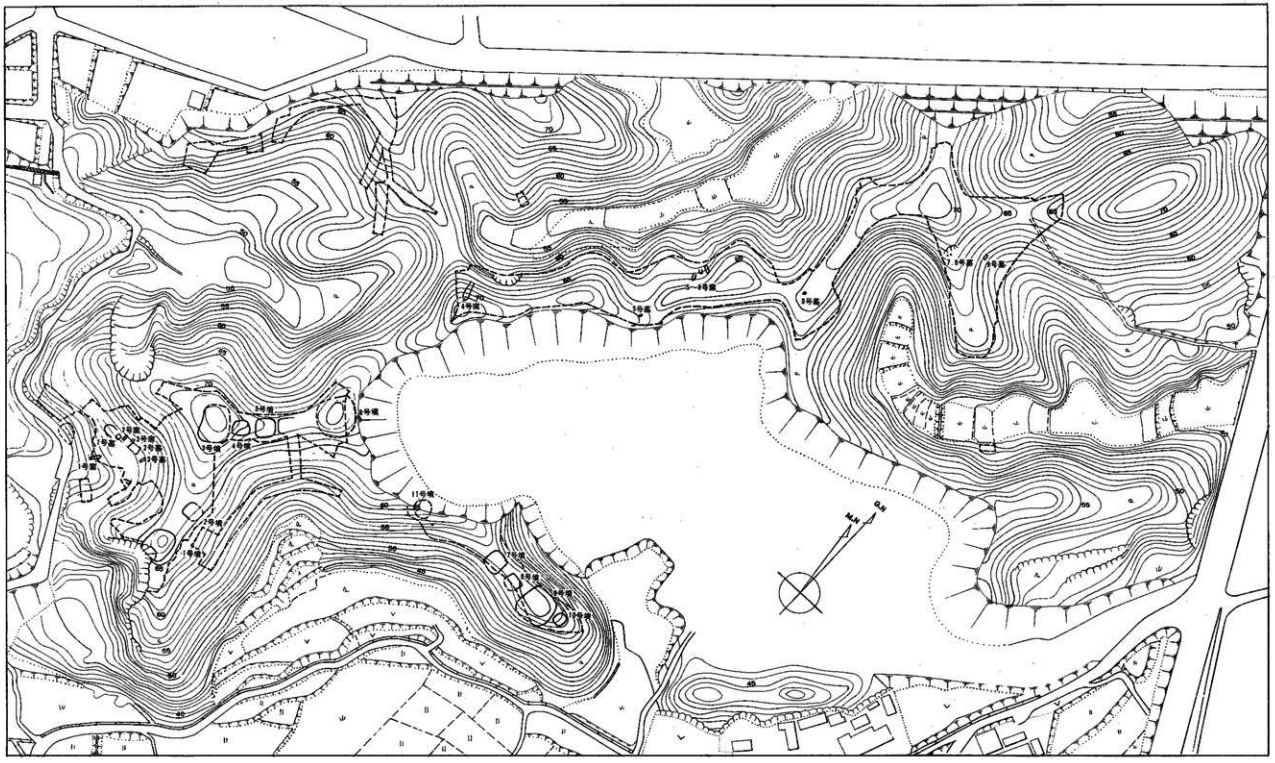


Fig. 2　宮ノ本遺跡第１・２次調査全体図（1:1,500）

Ⅱ．調　査　経　過

宮ノ本遺跡は昭和54年に太宰府市立太宰府西小学校建設に伴い発見された遺跡である。

この調査（第１次調査）では窯跡３基、古墳６基、墳墓４基をはじめとする諸種の遺構が発見されるとともに、１号墓からは我国初出土の買地券、３号墓からは唐式鏡が発見されるなど話題を呼び、関係者の努力もあって１号墓と２号墓は現地に保存されることとなった。

昭和58年度に至りこの太宰府西小学校の東側隣接地に仮称太宰府市立第３中学校の建設計画が持ち上がり、昭和59年２月から関係各課が集まり調整会議を行ない、埋蔵文化財の事前調査についても併せて協議された。その結果、昭和59年度初夏、宮ノ本遺跡第２次調査として発掘に着手する運びとなった。

調査関係者は以下のとおりである。

調査組織

調査主体	太宰府市教育委員会	
総　括	教育長	陶山直次郎（故人）
庶　務	社会教育課長	西山　義則
	文化財係長	黒板　　力
	文化財係主事	岡部　大治
調査担当	文化財係技師	山本　信夫
	〃	狭川　真一

調査参加者（順不同・敬称略・10日以上参加）

亀山　　隆	岡戸　哲紀	山田　富美	狭川　麻子	田中　平助	大野謙太郎
古賀　力雄	八柳健之助	松島　　勤	八尋　信樹	中島ウメノ	中島タキノ
中島タカ子	松島　順子	白水カズエ	白水いせの	萩尾マキ子	萩尾万寿子
平田　ソヨ	田原智恵子	高原改良子	白木　智枝	中嶋はじめ	徳永モモエ
田中テル子	萩尾ツチエ	萩尾須磨子	萩尾カネ子	萩尾　ナオ	藤崎　尚子
萩尾　克義	平田　和宏	中村　　宏	末次奈穂子	松田造園土木(代表 松田廣美)	

整理参加者（順不同・敬称略）

原野　正子	吉田　勝子	米川　治子	狭川　麻子	山田　富美	山村　信榮
岩下　恵子	田崎　笙子				

調査期間中及び整理期間中において次の方々から御指導、御教示を受けた。記して感謝の意を表するものである。（順不同・敬称略）

藤沢　一夫	水野　正好	西谷　　正	藤沢　典彦	平田　定幸	中村　　浩
森田　　勉	赤司　善彦	常松　幹夫	宮田　浩之		

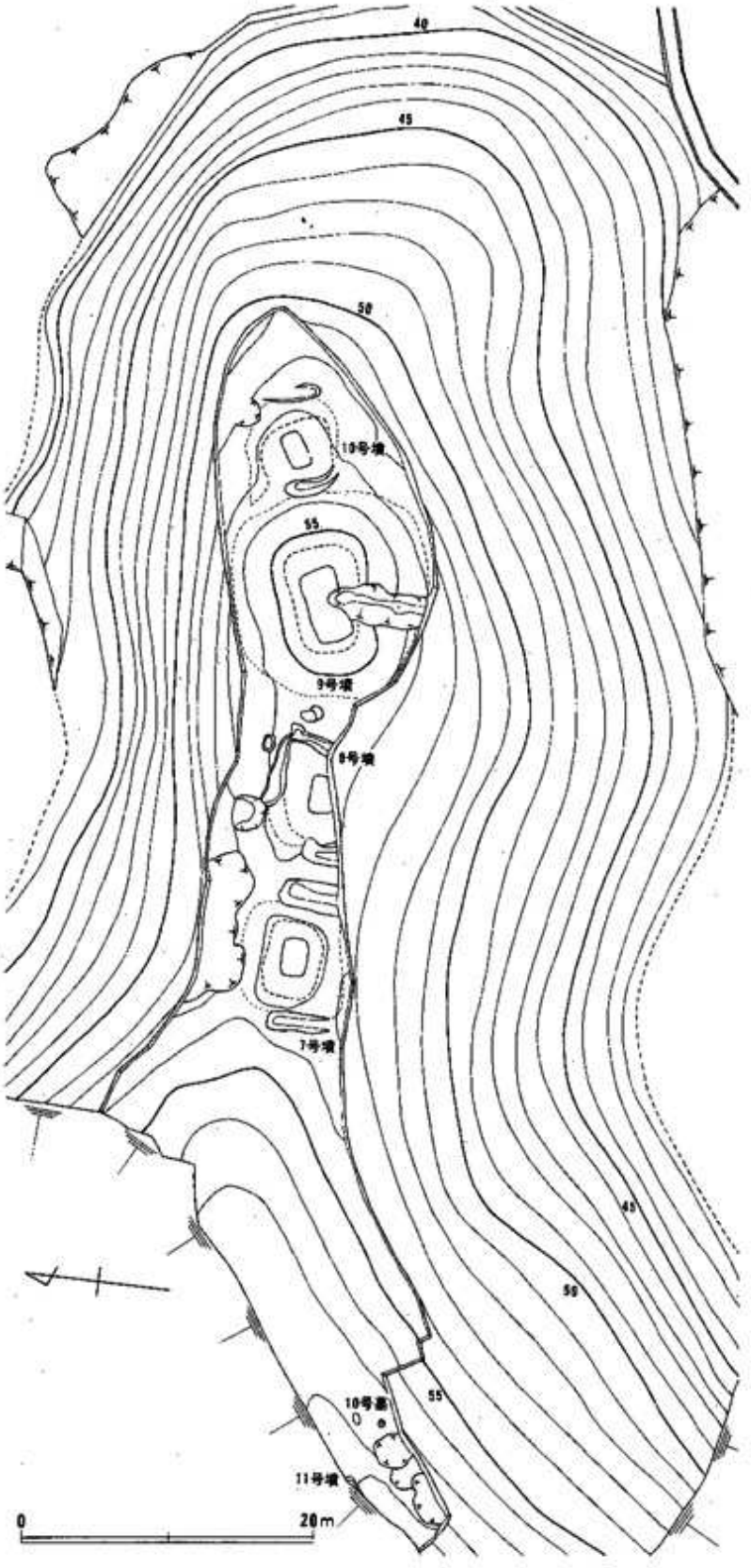


Fig. 3　古墳群周辺遺構配置図

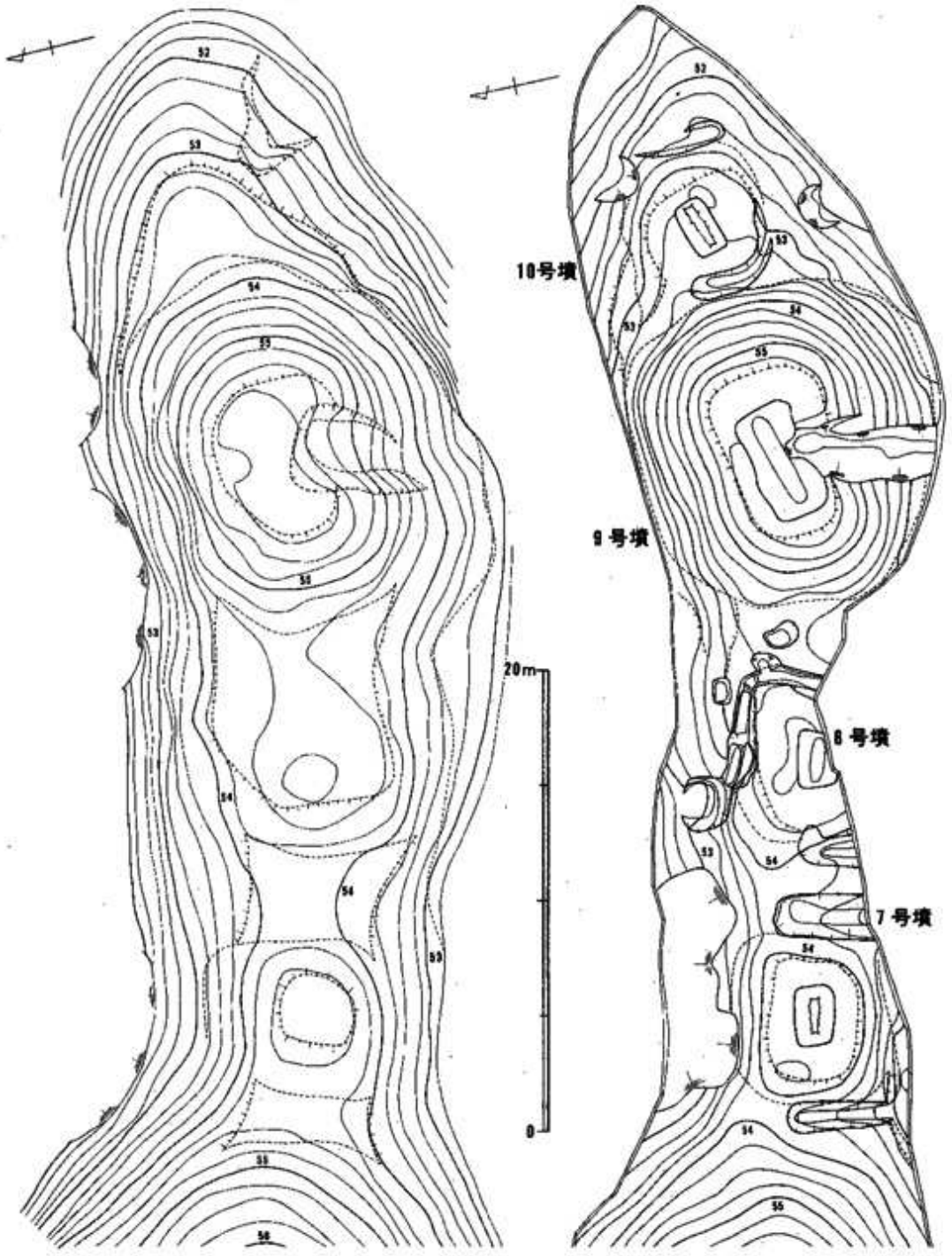


Fig. 4　古墳群主要部地形図（左は調査前）

Ⅲ. 遺 跡 の 調 査

造成計画区域の中央部分はすでにミニゴルフコース建設時に破壊されているが、周囲の残存する丘陵部分には古墳・窯跡・墳墓などの遺構が検出された。

調査区は大きく南北に分けられる。南側は第1次調査6号墳のあった主丘から東へ舌状に張り出す小支丘で、支丘基部に大破した古墳1基、尾根上に4基の古墳が存在する。尾根北斜面は開発により地形が若干改変されている。北側は、東西に延びる長い丘陵で、調査区西端の北斜面に須恵器生産を行なった4号窯、中央部付近北斜面に5～8号窯がある。尾根頂部付近には墳墓や火葬施設がみられる。調査区東側はよく地形が残っており、この東西の尾根から南に舌状に派生する丘陵の基部に火葬墓2基、その東裾に木棺墓1基を検出した。(Fig. 2)

〔1〕古墳の調査 (Fig. 3・4、Pla. 1～8)

(1) 7 号 墳

① 外部施設 (Fig. 5、Pla. 2)

東西8.5m (周溝心々間)、南北は崩落と調査区域の制約から不正確ではあるが約9mを測る方墳である。墳丘高は周溝底から1.0～1.2mである。墳丘は地山の一部を成形し旧表土と思われる灰褐色土上に最大厚0.5m程度の明茶灰色土を単純に盛るにとどまる。周溝は東西2方向を確認したが、北側にはなく、南側は未調査で判然としない。東側周溝の幅1.9m、西側周溝の幅1.4mを測る。西側周溝の墳丘側面南端コーナーはほぼ90度近い角度で東へ曲折し、墳丘南西隅の稜も明瞭で遺存状況は良好であった。この隅に対応する西側周溝西壁南端は墳丘側と同様に西へ90度近い角度をもって明瞭に屈曲するが、7号墳の西に接して古墳はなく、墓域を画する性格をこの西側周溝は併せもっていたものと推定される。

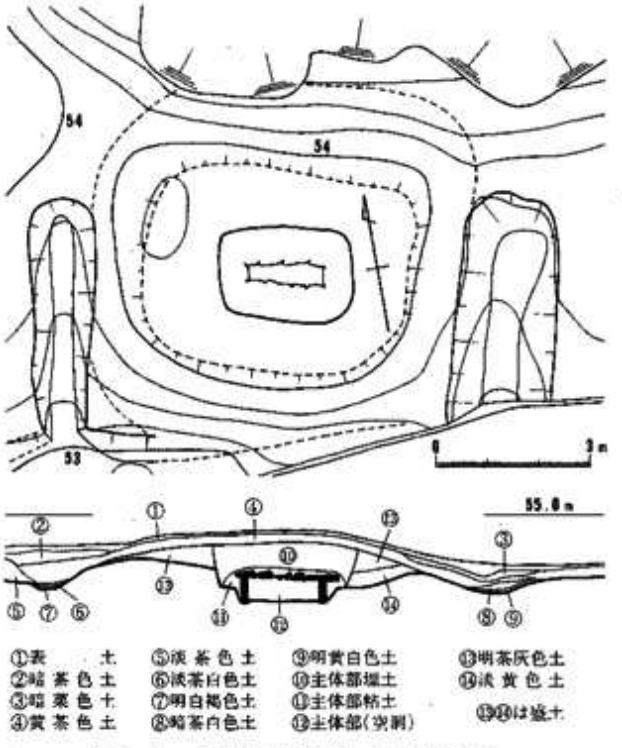


Fig. 5　7号墳地形図、土層観察図

② 埋葬施設（Fig. 6、Pla. 3）

成人用の箱式石棺を内部主体とする埋葬施設を墳丘中央に１基検出した。墓壙は墳丘盛土上面から穿たれた二段墓壙で、上段の長さ2.60m、幅1.65m、深さ0.5m、下段の長さ1.95m、幅

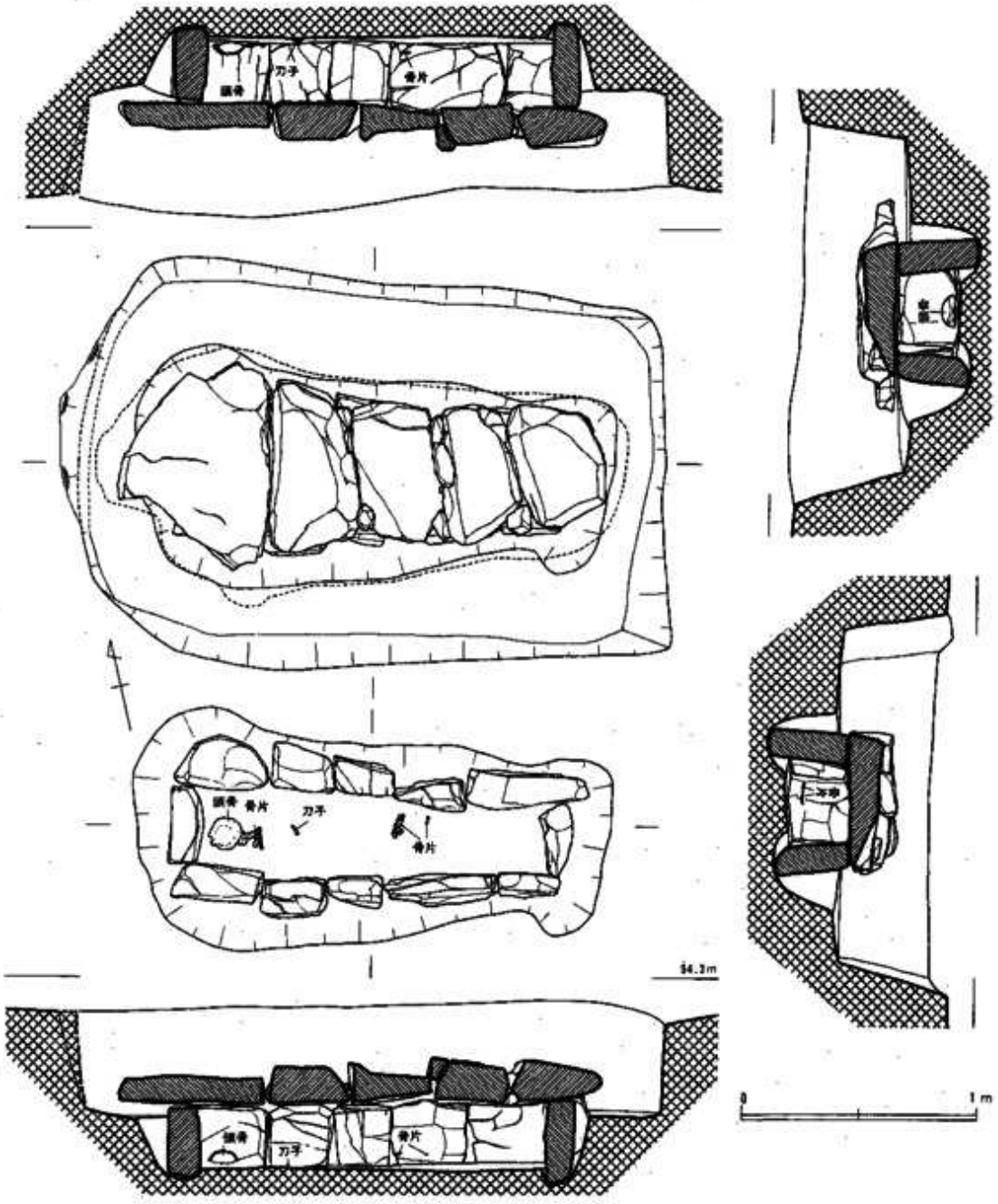


Fig. 6　７号墳主体部実測図

0.85m、深さ0.20m（各々最大値）を測り、下段墓壙内に石棺を配す。上段墓壙の輪郭検出時の観察では北西隅に若干の輪郭線の乱れが確認された。

石棺の棺外全面は粘土で覆われ、棺外周と下段墓壙の隙間にも粘土が充填され完全に石棺を密封していた。石棺の構造は小口石を両側石が挟み込む方式で造られ、小口石各々１枚、側石各々５枚を使用し、蓋石は５枚で構成され、各石の隙間を小石で埋めていた。蓋石の規模は頭位のものが最大（最大幅0.9m）で足位に至るにつれ小さくなる。床面には石材を用いていない。棺内の法量は長さ1.47m、東側の幅0.40m、西側の幅0.30mを測り、天井までの高さ0.25mを測る。棺内は赤色顔料が塗付され暗赤色を呈していた。人骨の遺存は東に頸骨の一部が残存していた。副葬品は人体胸部付近とみられるところに刀子１を検出した。

③　出土遺物（Pla.15）

鉄　製　品

刀子（a）　現存長4.6cm、最大幅0.9cm、峰幅（厚さ）0.15cmを測る。関及び柄部分は残存していない。

(2)　8　号　墳

①　外部施設（Fig.7、Pla.4）

東西7.4m（周溝心々間）、南北は不明であるが主体部と北側周溝の心々が約3.5mであり、推定約７mを測る方墳で、墳丘高は周溝底から約0.5mである。墳丘は地山を削り出して成形するが、墳丘北半部で遺跡全体を覆う黄茶色土と地山面との間に若干ではあるが盛土とみられる茶白色土が確認され、当初は簡単な盛土を行なっていたものと推定される。

周溝は東・西・北の３面で確認したが、北西隅にはなく墳裾を一周しない。周溝の幅は西側約1.4m、東側約1.0m、北側約1.1mを測る。北側周溝の西端付近に長さ2.3m、幅約0.6m、深さ0.3mの土壙状を呈する部分（２ＳＸ066）があり埋土上位から土師器高坏片と小型丸底壺片を検出したため、周溝

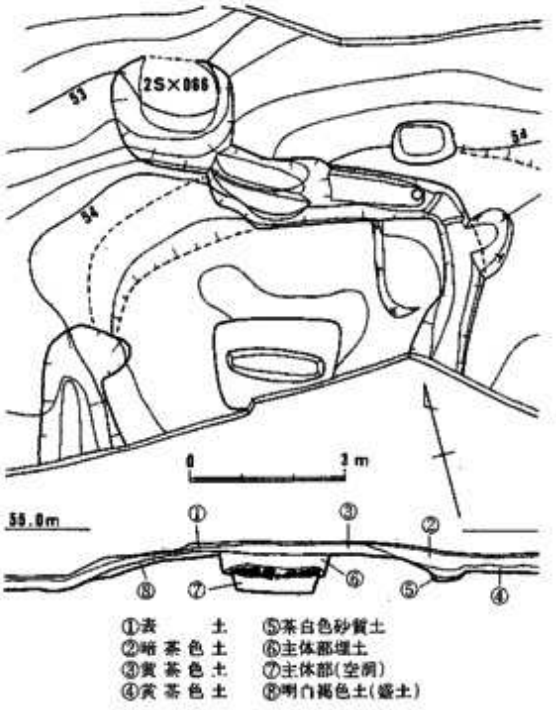


Fig.7　８号墳地形図、土層観察図

内に設けられた埋葬施設の可能性が考えられたが周溝との埋土の差異を確認できなかったことや、周溝埋土の堆積状況とこの土壙状遺構の埋土堆積状況が近似すること、遺物が墳丘から転落、散乱した状況で出土したことなどから、この遺構が埋葬施設であると決定付ける要素は見出し得なかった。

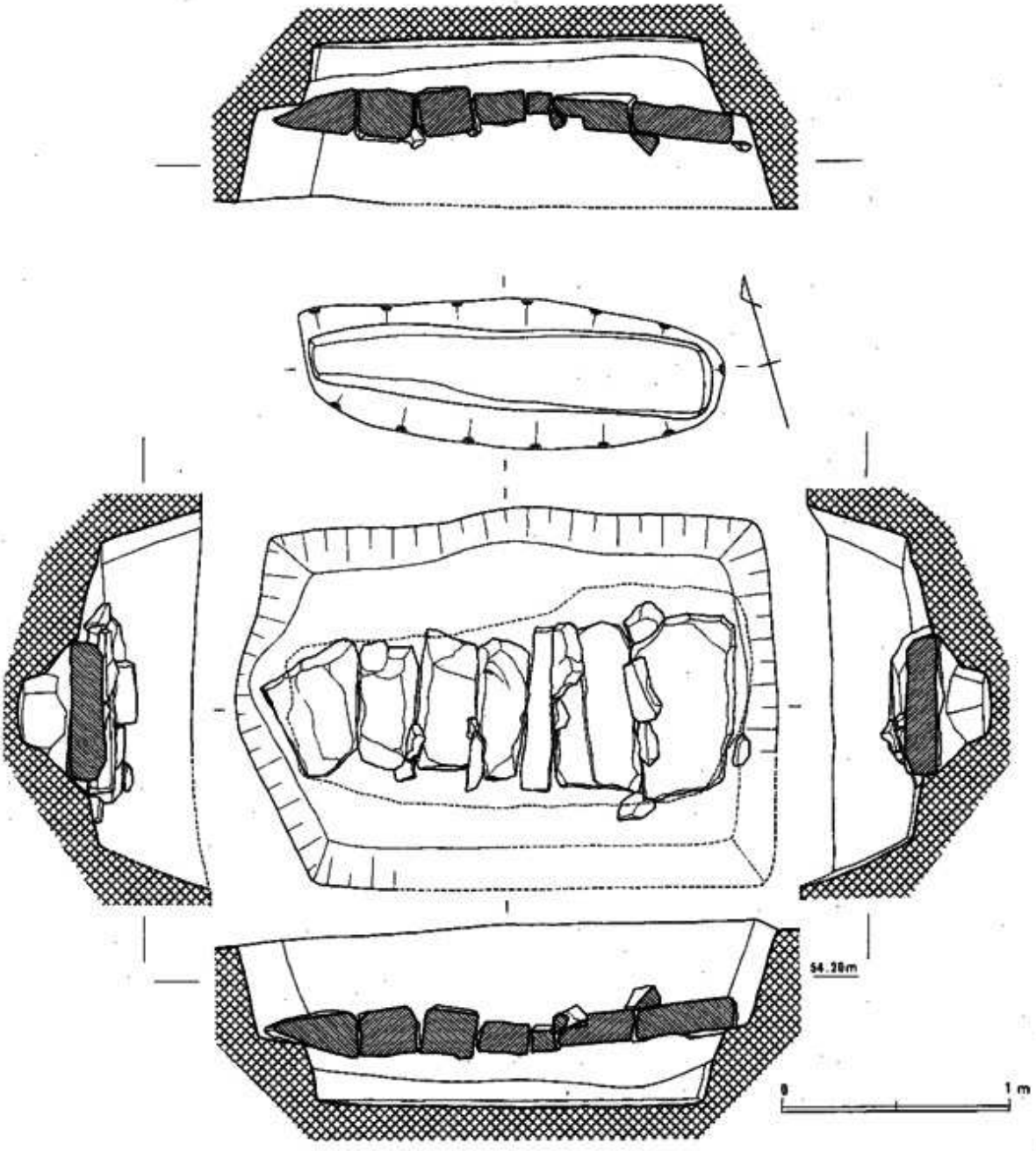


Fig. 8　8号墳主体部実測図

② 埋葬施設（Fig. 8、Pla. 5）

墳丘中央と推定される部分に石蓋土壙を内部主体とする埋葬施設１基を検出した。墓壙は二段掘りされ下段を直接埋葬主体の棺部分に当てている。上段の長さ2.40m、幅1.60m、深さ0.45m（全て検出部分の最大値）を測り、７号墳同様検出時の観察では上段掘方の北西隅部に輪郭の乱れる部分が確認された。主体となる下段は長さ1.85m、幅0.65m、深さ0.3m（上端最大値）を測るが、床面では長さ1.73m、小口部分の幅が東側で0.27m、西側で0.12mを測り、東に頭位を推定できる。内部には赤色顔料が塗付され暗赤色を呈していた。蓋石は７枚で構成され頭位と考えられる東端が最も大きく（最大0.8m）、西へ徐々に小さくなる。隙間は栗石で埋めており、全面を粘土で覆っている。

主体内からは遺物は検出されなかった。

③ 出土遺物（Fig. 9、Pla.15）

全て周溝埋土中から検出された。

土 師 器

小型丸底壺（1） 口径8.9cm、器高9.5cm、体部最大径9.7cmを測る。頸部がかなり上位にくるとともに内面の屈曲の線は不明瞭で丸味を帯びている。口縁部はわずかに内彎し端部を丸くおさめる。口縁部外面から体部中位にかけてはヘラミガキを施し、口縁部内面はハケ目調整である。体部内面及び外面下半は風化が著しく調整は不明である。

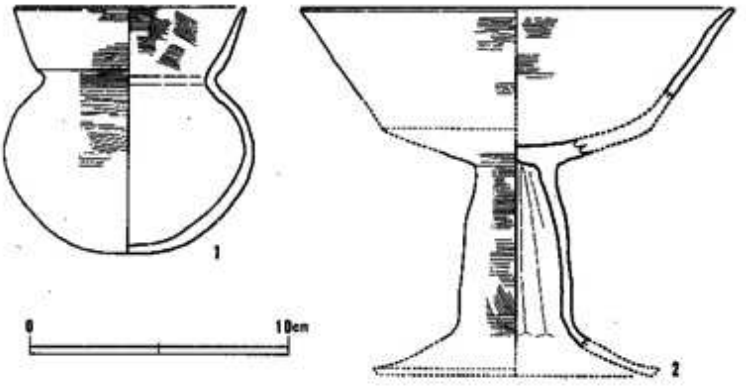


Fig. 9 ８号墳出土土器実測図

高坏（2） 同一個体とみられる断片を図上で復原している。口径16.7cm、推定器高14.0cm、脚部最大径4.5cmを測る。外方に開く口縁部の先端は丸くおさめられる。脚部は面取りされたような形状を呈している。口縁部内外面及び脚部内面とも風化が著しいが、脚部外面下位にハケ目がみられ、ハケ目の後にヘラミガキが施される。脚部内面はしぼり痕が明瞭に遺る。

(3) 9 号 墳

① 外部施設（Fig.10、Pla. 4）

東西長14.5m、南北長推定15m程度の方墳と考えられる。墳丘高は東側裾を規準にして約2.3

m、西側裾を規準にして約1.4mを測る。墳丘は大半を地山整形によって削り出され、灰褐色土と暗黄茶色土の単純な盛土を行なうだけにとどまり、現存盛土厚は最大で0.3m程度である。周溝は明確ではなく存在しなかった可能性がある。墳丘南側に盗掘壙とみられる大きな溝状の攪乱があるが、主体部の粘土の一部を崩したところで止まっており、幸いにして内部の破壊には至っていない。

遺物は墳丘西斜面下位から裾部に至って壺（5・6）、甕（4）が転落散乱したような状況で出土した他、北側裾部で小型丸底壺（2）、東側裾部で甕（3）の断片が出土した。

② 埋葬施設

（Fig.11、Pla. 6）

墳丘中央部に割竹型木棺を使用したとみられる粘土槨1基を検出した。墓壙は盛土上面から穿たれると共に、二段に形成され、上段の長さ5.1m、幅2.7m、深さ0.3～0.7mを測り、下段の長さ4.1m、幅0.8m、深さ0.2～0.3mを測る。棺には下段墓壙に粘土を貼りつめた上に安置され、その後全面を粘土で覆ったものとみられるが、粘

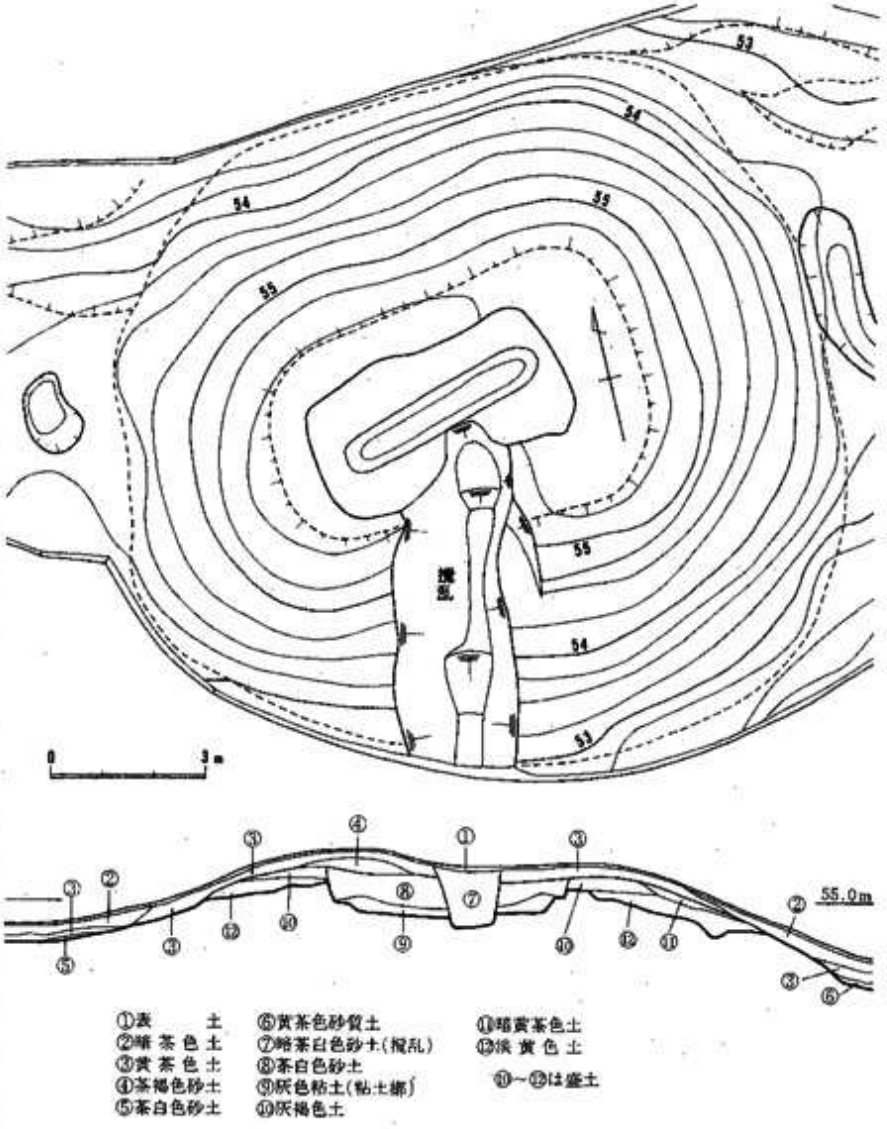


Fig.10　9号墳地形図、土層観察図

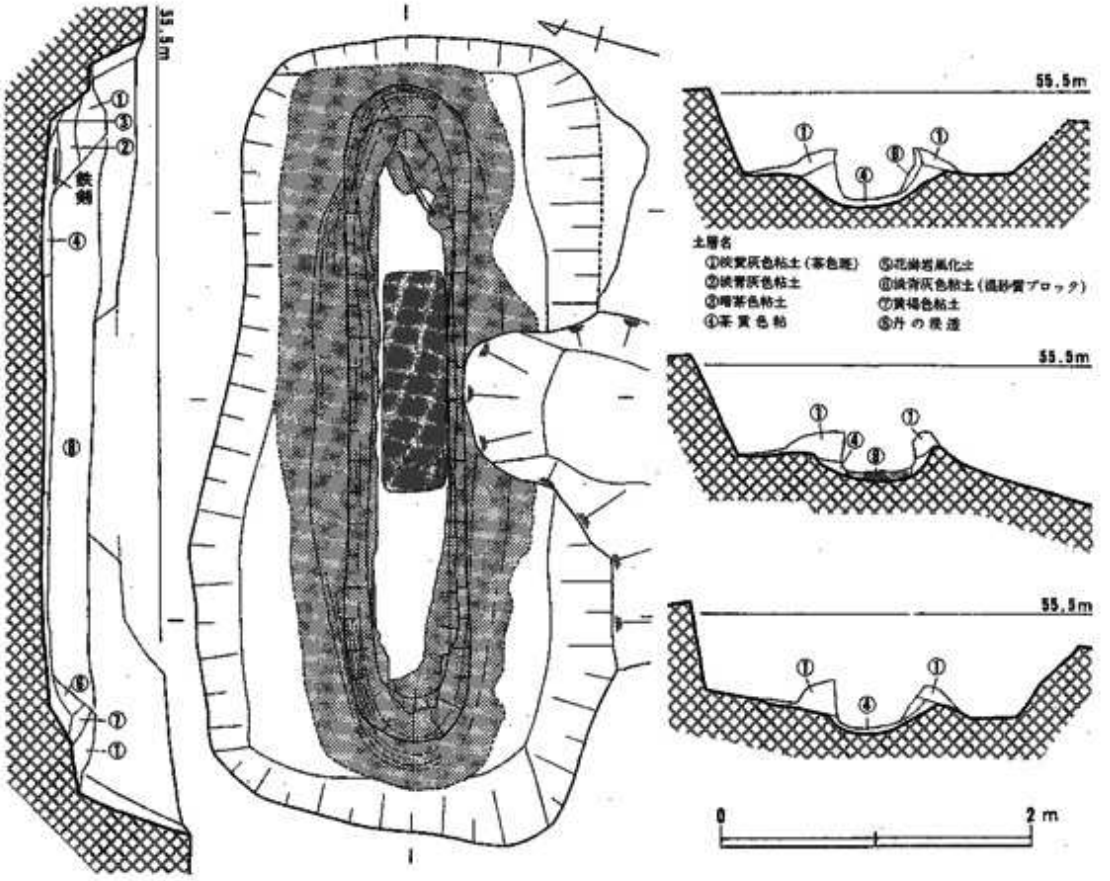


Fig.11　9号墳主体部実測図

土は上段墓壙床面のほぼ全面に貼り巡らされている。棺の長さは約3.1m、幅約0.5mを測り、棺中央部の1.4m分に集中して朱が観察された。

遺物は下段墓壙東辺棺外に鉄剣（7）、墓壙南西部分の埋土上面で底部に穿孔を施した土師器直頸壺（1）が検出された。直頸壺は主体に伴う供献土器と考えられる。

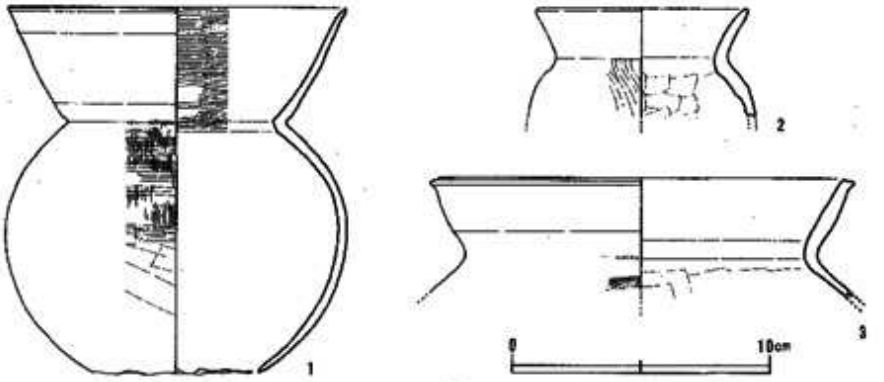


Fig.12　9号墳出土遺物実測図(1)

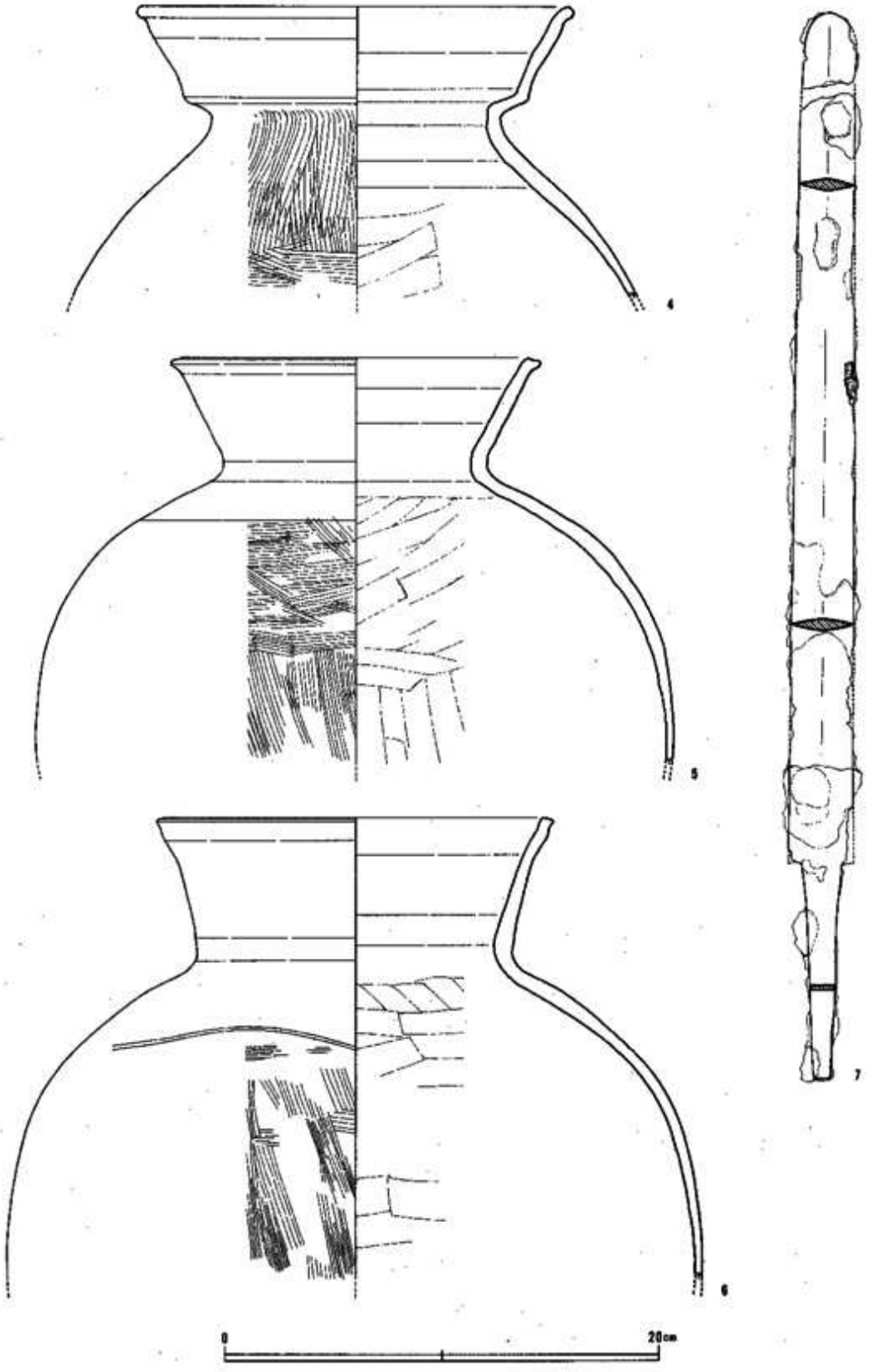


Fig.13　9 号墳出土遺物(2)

③ 出土遺物（Fig.12・13、Pla.16）

土 師 器

直頸壺（1） 口径13.3cm、現存器高14.0cm、胴部最大径13.5cm。「く」字状の頸部からわずかに内彎気味に立ち上がる口縁は端部でやや外反する。胴部外面下半はヘラケズリ、頸部から胴部中位までの外面ではタテ方向のハケ目を施し、口縁部はヨコナデである。口縁部内面及び外面の胴部中位以上に丁寧なヘラミガキが認められる。底部は焼成後に穿孔している。内外面共に丹を塗付した形跡を認める。

小型丸底壺（2） 口径8.2cm。体部内面はヘラケズリ、口縁部内面から外面にかけてヨコナデ、外面全体にヘラミガキを施し丹を塗付する。ヘラミガキは口縁部の一部が横方向の他は、タテ方向に施されている。

甕（3・4） 3は口径15.4cm。口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面はハケ目、体部内面はヘラケズリ調整。4は口径20.3cmの複合口縁を有するものである。頸部から口縁部への屈曲は小さく、上段の口縁はやや開き気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。体部内面上位及び口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、体部外面は上位がタテ方向、他はヨコ方向の粗いハケ目である。

壺（5・6） 5は口径17.2cm。胴部最大径29.6cm。口縁部の先端は外方につまみ出され、上面はわずかに中央をくぼませる。口縁部はヨコナデされ、体部内面はヘラケズリ、体部外面は上位をほぼヨコ方向、中位以下をほぼタテ方向のハケ目で仕上げる。6は口径18.4cm、胴部最大径31.2cm。わずかに開く口縁部の先端はほぼ平坦におさめられる。肩部に一条の波状沈線を有するが、全周するか否かは決定できない。口縁部及び肩部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリ、体部外面はハケ目で仕上げる。

鉄 製 品

剣（7） 検出時から先端が折れていて欠損部は錆で覆われていると共に図上復原を試みたが幅の上で連続性がなく、埋納時点ですでに欠損していた可能性も考えられる。復原全長49.0cm、刃部最大幅0.6cm、柄は全長9.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.2cm。

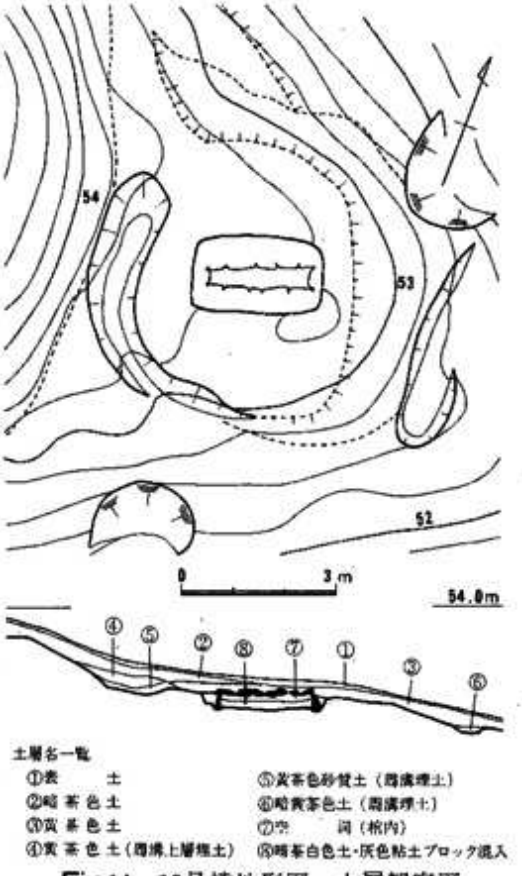


Fig.14 10号墳地形図・土層観察図

(4) 10 号 墳

① 外部施設（Fig.14、Pla.7）

一辺6.5m（周溝心々間）内外の方墳と推定されるが、土砂の流出が著しく決定する要素を欠く。墳丘盛土は全て現存せず、表土及び丘陵全体を覆う黄茶色土を除去すると主体部の石棺が露

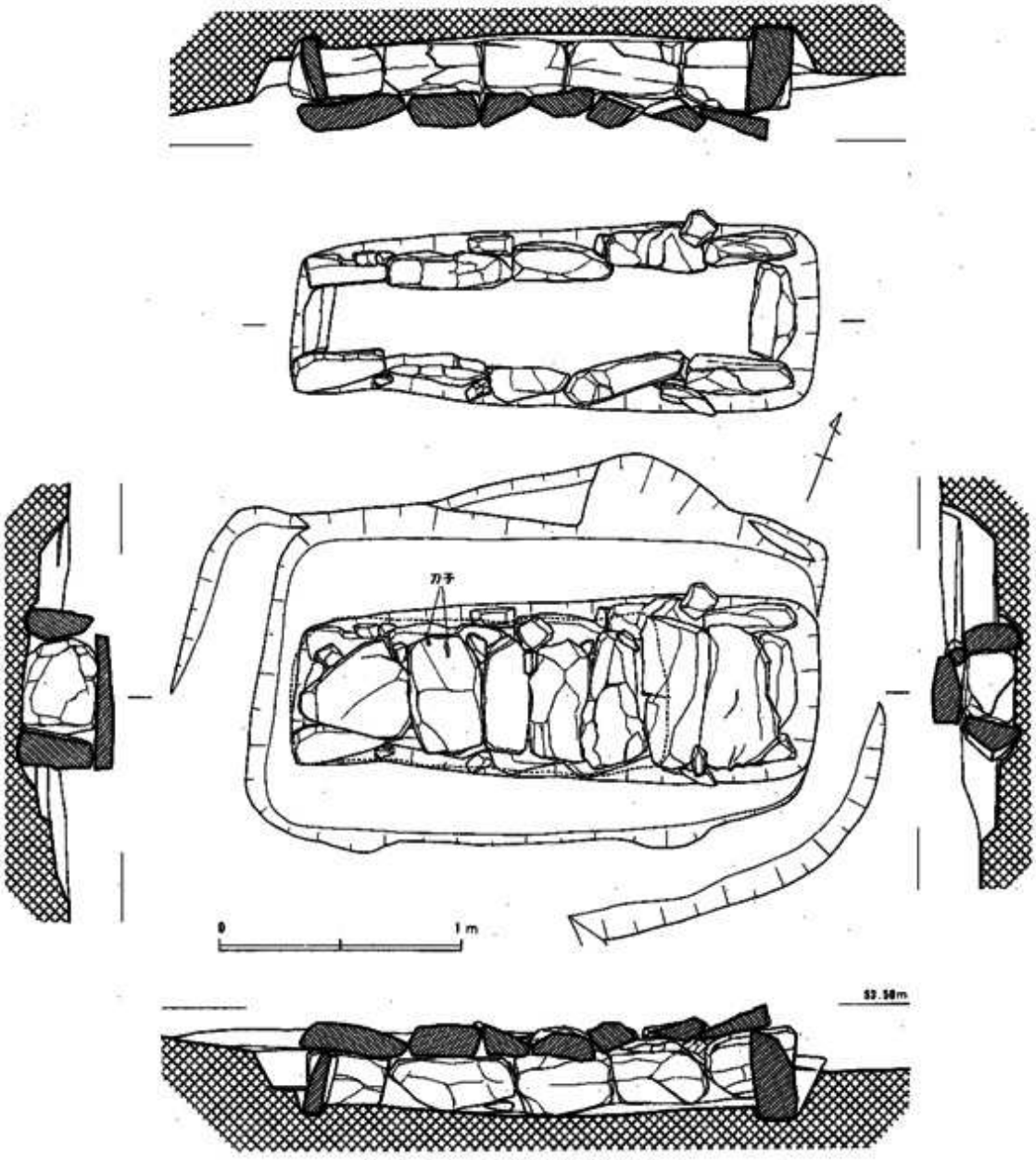


Fig.15　10号墳主体部実測図

出する状況であった。

周溝は東側がごく浅い状況で検出され、西側はその北端が明瞭な他は浅い。西側周溝は北端で立ち上がり、7・8号墳と同様の形状を示すものと判断される。

遺物は東側周溝埋土中に壺（2）、墳丘外東斜面の崩壊土中に小型丸底壺（3）が検出された。小型丸底壺は崩壊土中検出であるが、10号墳からの遊離と考えて、一応この項で報告する。

② 埋葬施設（Fig.15、Pla.8）

箱式石棺である。墓壙は二段に形成されたものと判断されるが不明瞭であり規模は知り得ない。下段は長さ2.2m、幅0.75mで内部に箱式石棺を置く。石棺は側石各5枚、小口石各1枚で形成され、棺内の長さ1.8m、東小口幅0.38m、西小口幅0.28m、被蓋時の内高0.25m前後を測る。蓋石は7枚で構成され東側のものほど大きい。石棺は全体を粘土で覆われていたものと考えられるが、大半が土砂の流出で露出、消失したらしく石棺材の隙間や掘方と石材の間に認められただけであった。棺内は赤色顔料が塗付されていた。

遺物は棺内には無く、石蓋上（西から2枚目）に刀子（1）を検出した。刀子は粘土と石蓋の間に位置していたと判断されたが中央で折れ、遊離していた。

③ 出土遺物（Fig.16、Pla.15）

鉄 製 品

刀子（1） 長さ12.0cm、幅1.2cm。柄の部分に木質が遺存している。

土 師 器

壺（2） 体部にミガキを有する点から壺として報告する。口径14.4cm、器高10.7cm、胴部最大径14.0cm。緩やかに屈曲する頸部を有し口縁部は大きく開き、端部に至り若干内彎する。底部は丸いがやや尖り気味である。口縁部及び体部中位以上は基本的にヨコナデで調整しているが、最終の仕上げはヘラミガキである。ヘラミガキは体部外面中位以下がかなり粗く、体部内面に認められない他はヨコ方向の整ったものである。体部外面の一部と頸部内面にハケ目が観察され、体部内面下半は指圧と粗雑なナデで仕上げられる。

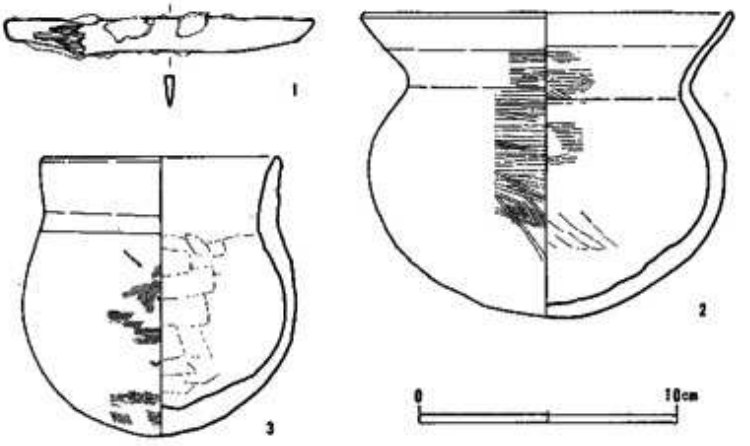


Fig.16 10号墳出土遺物実測図

小型丸底壺（3）　口径9.4cm、器高10.7cm、胴部最大径10.6cm。頸部は不明瞭で口縁部もほぼ真直に立ち上がり端部もシャープさを欠く。全体に器肉は厚く、粗雑な作りである。

口縁部内外面ともに粗いヨコナデで、体部内面はヘラケズリ、体部外面は粗雑なハケ目とナデである。

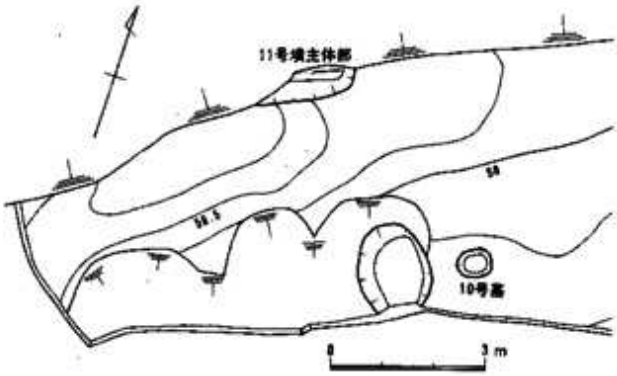


Fig.17　11号墳周辺地形図

(5)　11　号　墳

①　外部施設（Fig.17、Pla.7）

墳丘の大半は過去の造成で消滅し、遺存部分についても明確な規模を知り得る資料は得られなかった。

②　埋葬施設（Fig.18）

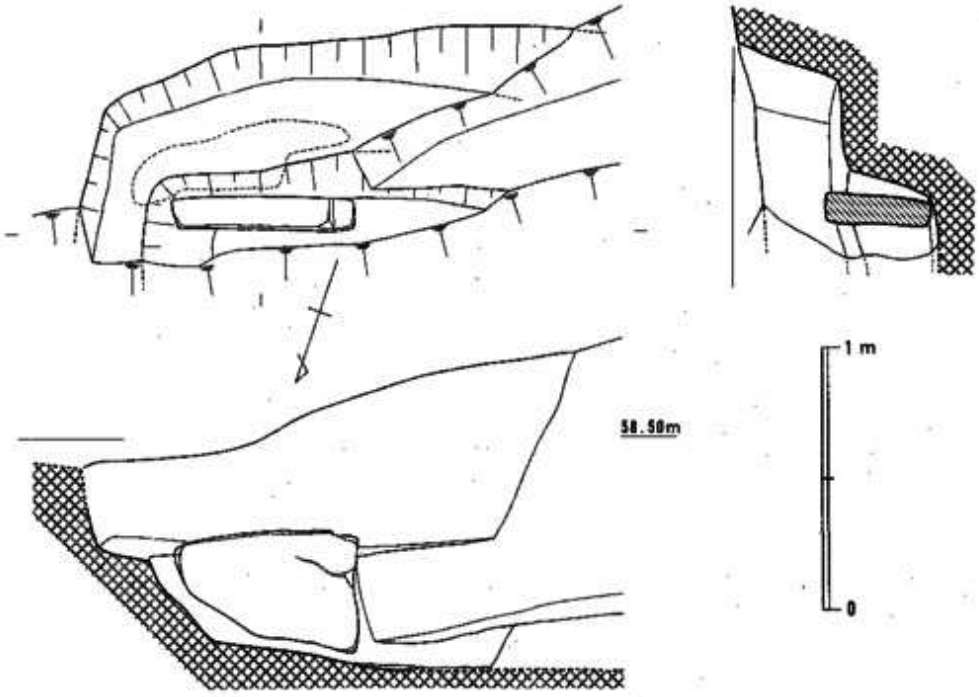


Fig.18　11号墳主体部実測図

二段に造られた墓壙を有する箱式石棺を主体とするが、側石１枚が旧位置を保つ他は遺存しない。石棺は他と同様粘土で覆われていたものとみられ、東小口部南辺に若干確認された。１枚のみ遺存する側石は南側石最東端のものにあたり、幅0.7m、高さ0.45mである。7・10号墳の石材に較べかなり大きく、石棺の規模も前者より大きかったものと推定できる。遺物は検出されなかった。

〔2〕 墳墓の調査

(1) 5 号 墓

① 立 地（Fig.20、Pla. 9）

調査区北辺丘陵の中央付近で尾根の起伏による一段低くなった地点に形成されている。現況は二段に造成されていたが、この造成は後世のものである。この同じ地点には後述する火葬施設とみられる２ＳＸ016、２ＳＸ040がある。

② 遺 構（Fig.19、Pla.11）

長軸1.03m、短軸0.78m、深さ0.17mを測る歪な長方形状を呈している。床上には長さ0.3m内外の石を２個据えており、棺台としたものと思われる。外壁は垂直気味に立ち上がり、床は中央がやや深いがほぼ平坦である。埋土は暗茶褐色系の土であるが、最下層と中間層には炭化物が多く検出された。棺台とする二つの石の間から鉄釘５点と焼骨小片を検出した。鉄釘は遊離した状況であった。床に小ピットを検出したが、直接関連するか否かは不明である。壁は焼けていない。出土した骨片や土壙の規模などから火葬墓と考えているが、火葬施設に類似の形状があり、その可能性も否定できない。

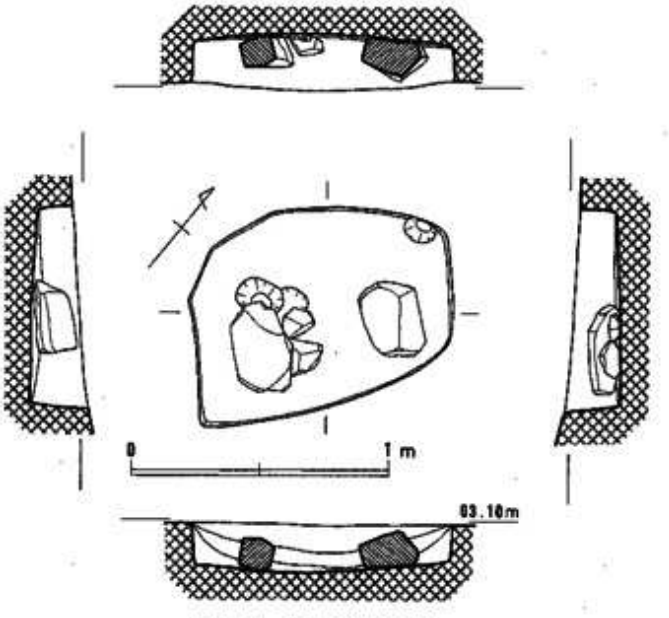


Fig.19　5号墓実測図

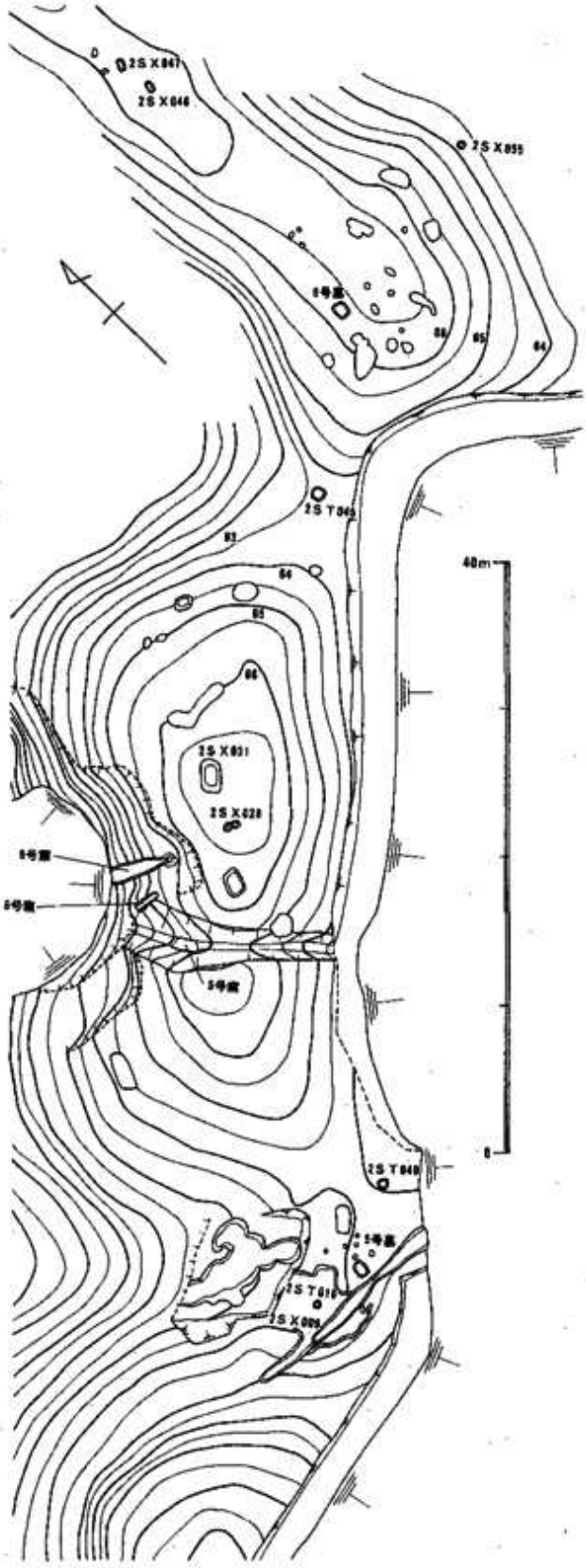


Fig.20　5・6号墓周辺遺構配置図

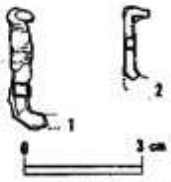


Fig.21　5号墓出土釘実測図

③　出土遺物（Fig.21）

鉄　製　品

釘（1・2）　1は現存長3.2cm、茎部幅0.4cm。2は現存長1.9cm、茎部幅0.3cm。両者とも茎部中位で故意に折り曲げられている。先端部は遺存していない。

(2)　6　号　墓

①　立　地（Fig.20、Pla.9）

調査区北辺中央の主丘が北へ折れまがる付近の頂部から西側にやや降った地点に所在する。後述する7・8号墓の背後の丘陵からみれば南へ舌状に延びた支丘の先端部付近に位置することになる。周辺には火葬施設とみられる2SX045や土師器甕を埋置した2SX055などがある。

②　遺　構（Fig.22、Pla.11）

長さ1.18m、南小口幅0.85m、北小口幅0.7m、深さ約0.2mを測る隅丸長方形のプランを呈する釘を使用する木棺墓である。

鉄釘は四隅を中心に発見されたが、全て遊離しており原位置を保持すると考えられるものはない。また全ての鉄

釘は「コ」字形に折り曲げて使用されたものとみられる。

遺物は鉄釘の他に中央やや北寄りの埋土中からガラス小玉２点を検出した。

③　出土遺物（Fig.23・24、Pla.17）

鉄　製　品

釘（１～５）　茎部幅0.5cm、長さは最もよく遺存するもので7.1cmである。全て茎部中位やや頭部寄りと端部近くの２箇所で折り曲げられ、「コ」字状を呈している。中位の屈曲はほぼ90度に近いが端部のそれはやや外方へ傾く。２～５は木質がよく遺存しており、頭部から1.5～2.0cmの付近で全て木目が異方向に走り、板材の厚さを知ることができる。中位の屈曲部以下は本図における上面に木質を遺すものもあるが下面にはなく、先端部付近では再び木質を全面に認めることができる。頭部の形状は平坦で原形を保っており、鋲として使用されたとは考え難い。

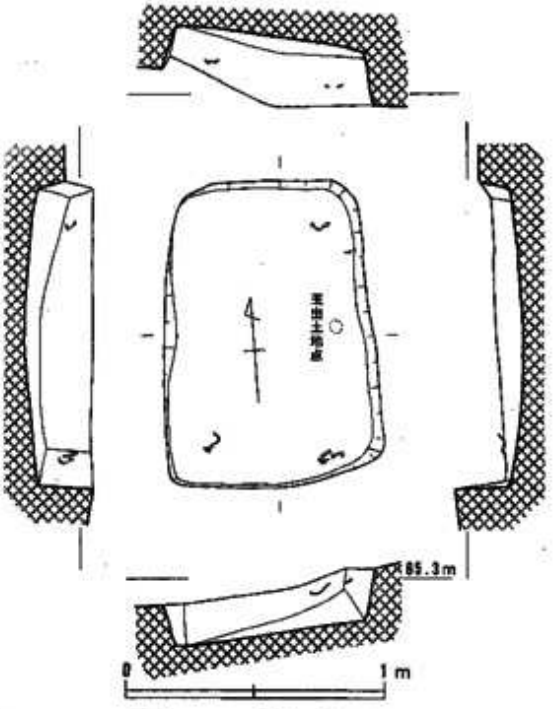


Fig.22　６号墓実測図

ガラス製品

小玉（６・７）　６は径0.4cm、高さ0.3cm、穿孔径0.2cm、７は径0.4cm、高さ0.4cm、穿孔径0.15cm。両者とも平面円形で、淡青白色を呈する。

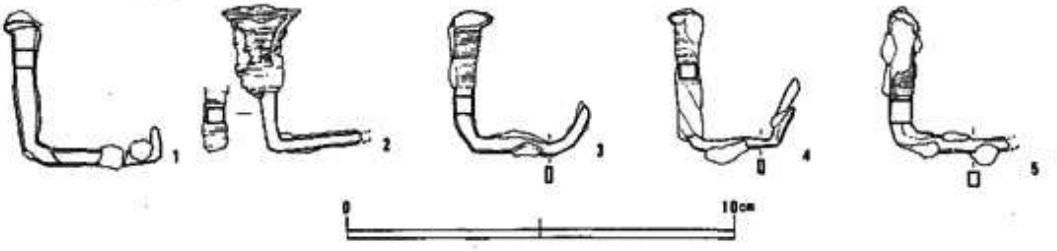


Fig.23　６号墓出土鉄釘実測図

(3)　７・８号墓及び関連遺構

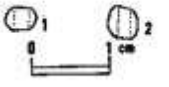


Fig.24　６号墓出土玉実測図

①　立　地（Fig.25・26、Pla.10）

６号墓のある丘陵の北端は一段高く隆起し円丘状を呈している。ここか

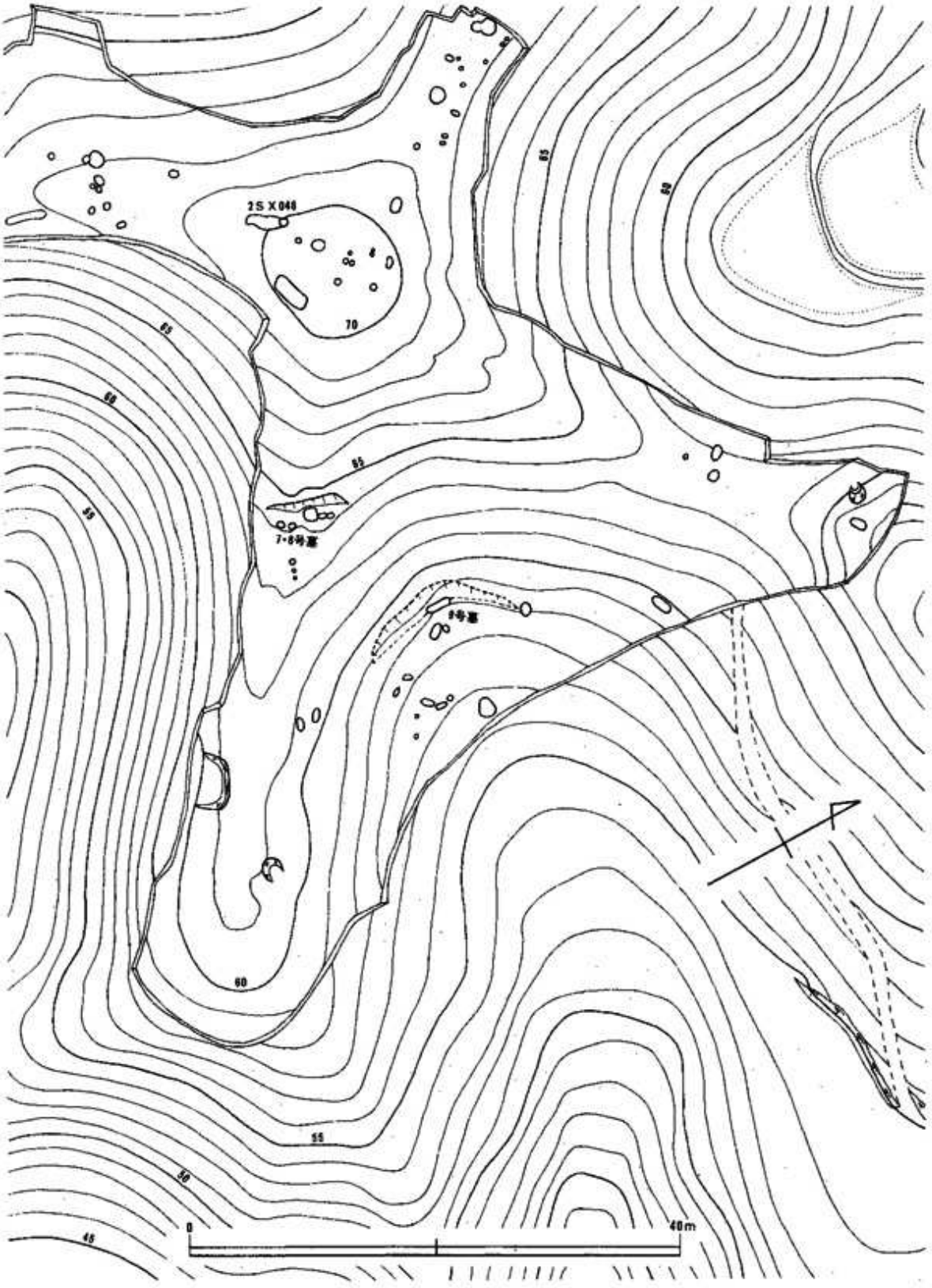


Fig.25　7・8号墓周辺地形図

ら南東方向へ舌状に派生する小支丘があり、支丘基部の頂部にテラス状遺構２ＳＸ054を形成し、そのテラス部分に７・８号墓を造営している。７・８号墓には切り合い関係はなく、２ＳＸ054内部においても遺地に優劣は認め難い。

なお両墓とも中央に大株が存在したために埋置穴の一部が破壊され、７号墓は根の巻き付きで蔵骨器が遊離し原位置を保たず、８号墓は伐採時に重機が直上を走行したらしく原位置を保つものの押しつぶされていた。

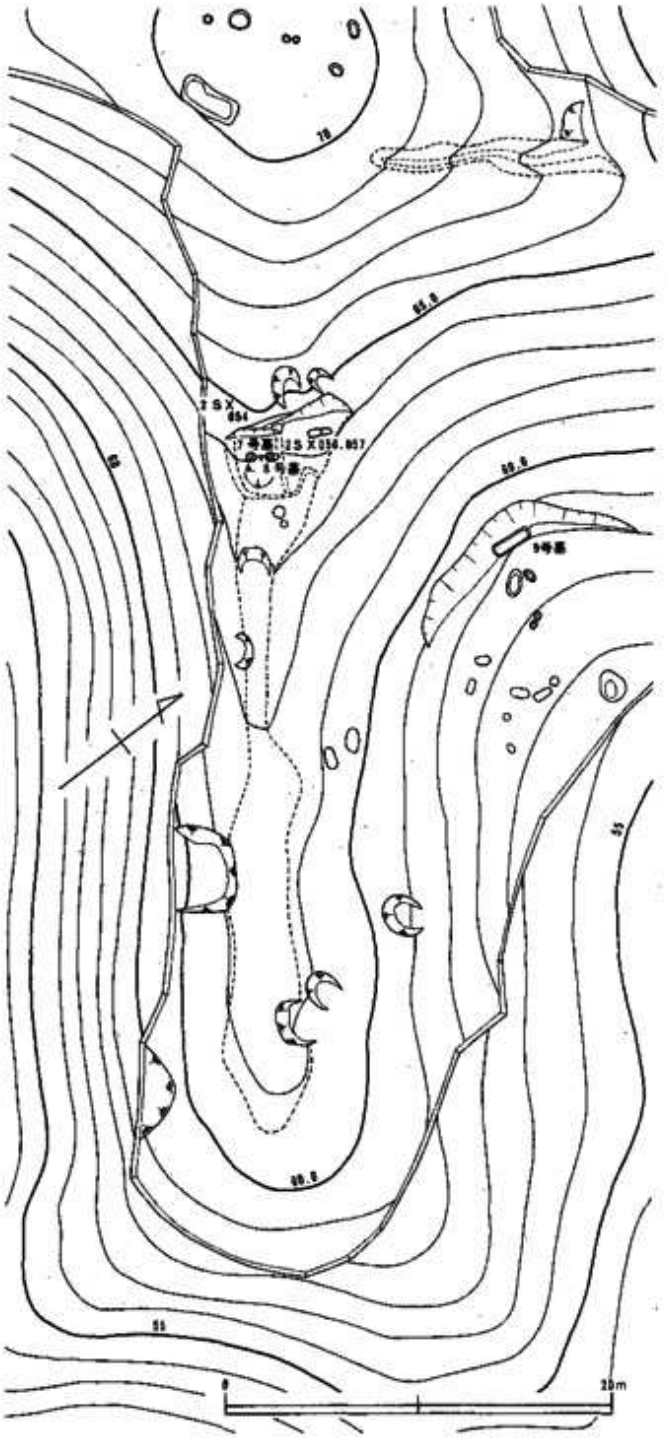


Fig.26　７・８号墓周辺遺構配置図

② 遺　構（Fig.26・27、Pla.12）

２ＳＸ054

墳墓の報告に先立ち、造成遺構の解説を行なう。

この遺構は支丘基部の傾斜交換点付近をテラス状に造成したもので、そのテラス部分の規模は南北3.0m×東西3.2mの不整方形状を呈し、段は約0.5mの高さを有している。この２ＳＸ054は墳墓の背後だけでなく北方に3.5mほど延長され、その前面も若干ではあるがテラス状を呈し、そこには２ＳＸ056、057などの土壙状遺構が存在する。埋土の観察では２ＳＸ054の全てが同一埋土で、この段の形成された前後関係は知り得ないが、立地から７・８号墓に伴うものが先行した可能性が強いと思

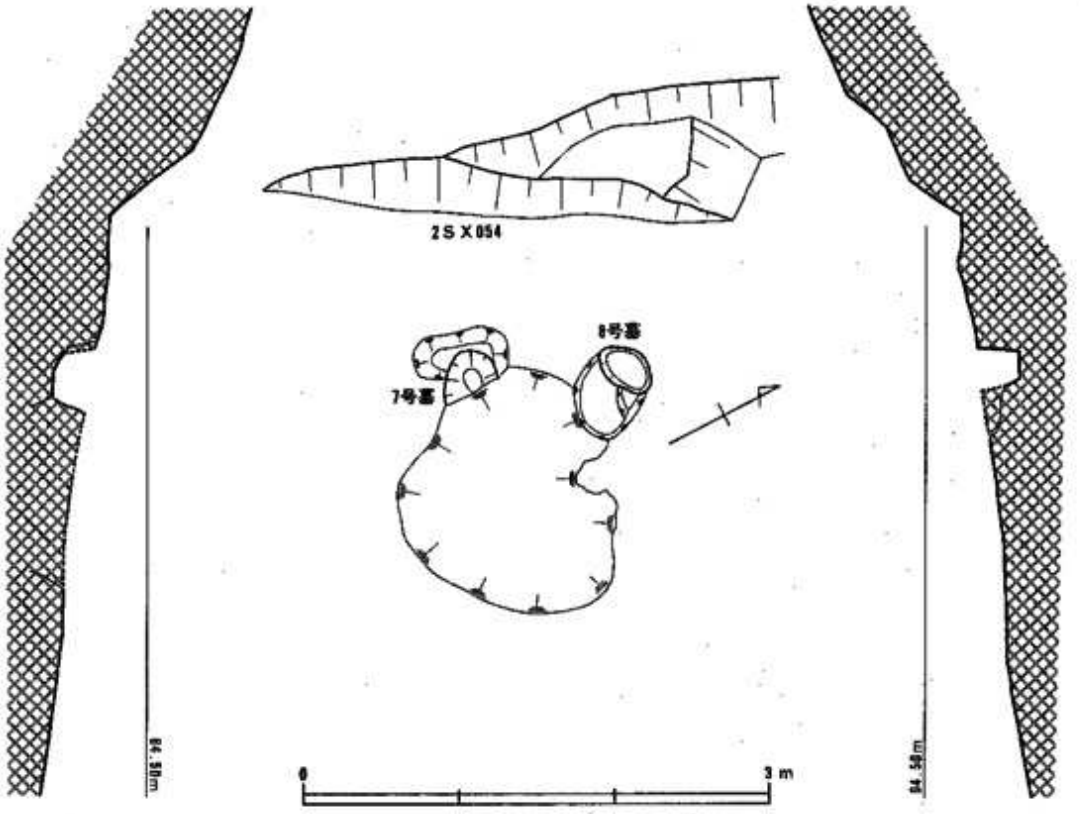


Fig.27　7・8号墓2SX054実測図

われる。

7　号　墓

株の攪乱で多くを失うが径0.3m内外、深さ0.25mの円形小ピットを埋納穴とし、内部に須恵器短頸壺を蔵骨器として埋置していた。内部に骨の遺存はなかったが、火葬墓としてとらえておく。

8　号　墓

株により上部を欠失するが、径0.25m、深さ0.25mの円形小ピットを埋納穴とし、須恵器長頸壺を容器とし、土師器埦を蓋とする蔵骨器を正位で埋納していた。内部に骨の遺存はなかったが、火葬墓としてとらえておく。

2SX056

2SX054東端付近で検出した須恵器甕の胴部の散乱地である。検出時は大破していたが全ての破片が接合した。

2SX057

長さ0.55m、幅0.45m、深さ0.3mの土壙状遺構で東側は他の土壙と接していて、輪郭を明確に

し得なかった。埋土上面に須恵器１点を検出した。

③　出土遺物

７号墓出土土器

(Fig.28、Pla.17)

須　恵　器

壺蓋（１）　口径16.7cm、器高4.5cm、天井部径15.3cmで、天井部中央にボタン状のツマミを貼り付ける。天井部は平坦でやや外方に開き気味の体部を有し、端部は平坦に近い。体部内外面ともヨコナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ、内面はナデである。体部に火ダスキ痕が認められる。

短頸壺（２）　短い頸部はわずかに外方に開き気味で、口縁端部は平らにおさめている。わずかに内彎する肩部から円くなだらかな曲線で胴部にいたる。胴部は直線的で、胴部下位から底部にかけて内彎し稜を有する。高台は低く、台形状を呈している。端部は平らであるが、高台径は小さい。胴部と肩部の境付近に幅4.5cmの把手を一対配している。胴部の下方３分の１程を回転ヘラケズリするが他はヨコナデ調整である。口径13.6cm、器高16.4cm、高台径11.0cm、体部最大径22.3cmを測

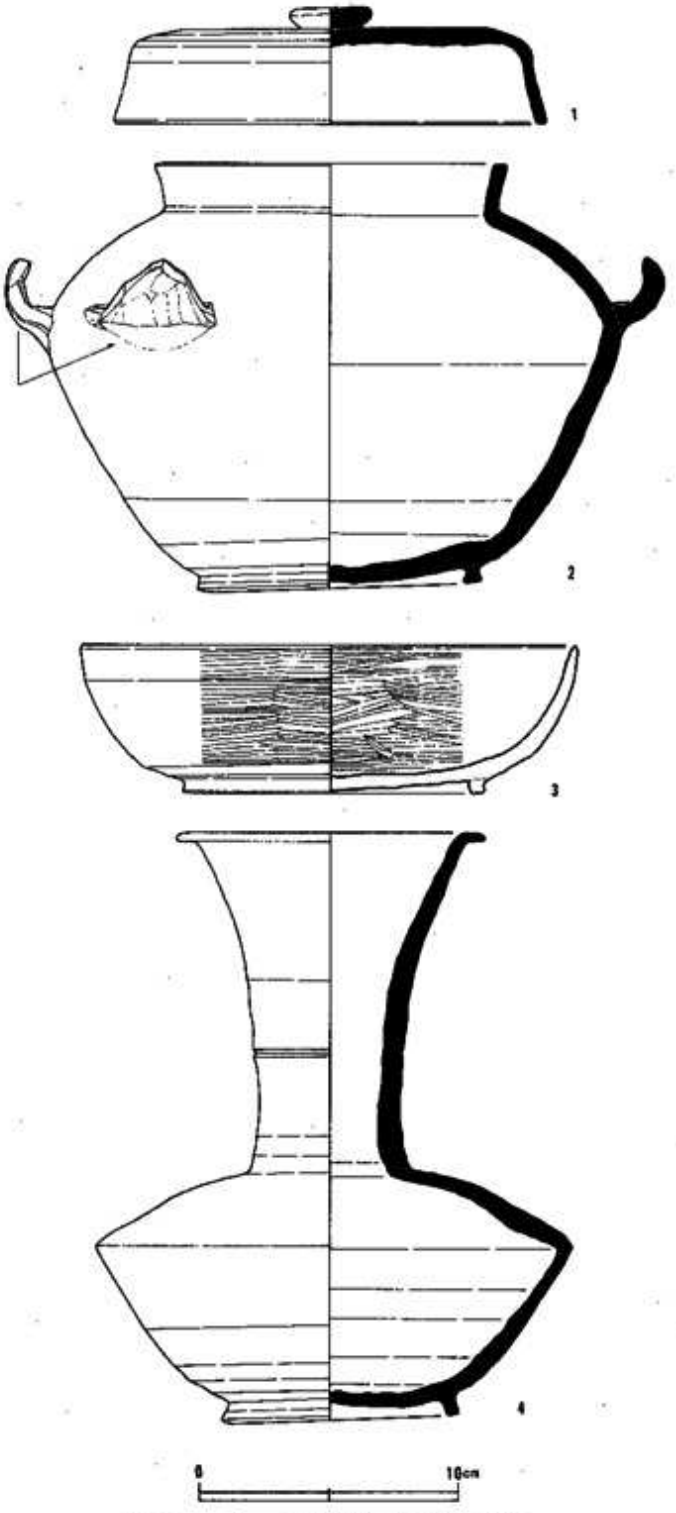


Fig.28　７・８号墓出土土器実測図

る。肩部にみられる火襷痕は、1の蓋に遺るものと合致しており同時焼成されたことが知られる。

8号墓出土土器（Fig.28、Pla.17）

土　師　器

椀C（3）　口径19.4cm、器高5.7cm、高台径11.4cm。内彎する体部を有し口縁端部は尖り気味におさめる。高台は押しつぶされたような四角形を呈するが、わずかに外方に開き気味である。体部内外面及び底部内面は丁寧なヘラミガキ、体部外面下位から底部外面にかけて回転ヘラケズリを施す。

須　恵　器

長頸壺（4）　口径11.9cm、器高22.8cm、高台径9.2cm、胴部最大径18.3cmを測る。わずかに内彎気味に立ち上がる体部と肩部の境は明瞭で鋭い稜をなす。肩部はわずかに内彎気味で頸部にとりつく。頸部は外方に大きく開きながら立ち上がり、口縁は外方に折り曲げられ端部を丸くおさめるが、口縁部上面は平坦である。頸部中位やや下方に一条の沈線を配する。高台は外方に張り出すが形状は四角形である。頸部は肩部の上面に接合され、高台は貼り付けによる。口縁部内外面、体部内外面及び底部内面はヨコナデ、体部外面下半は回転ヘラケズリ、高台を含む底部外面の大半はヨコナデ、底部外面の中央部は未調整。

2SX054出土遺物（Fig.29、Pla.18）

土　師　器

小鉢（1）　東端の埋土中から検出されたもので、手捏ねである。全体に指頭痕が明瞭に観察され内面の一部にはタテ方向のナデが若干施されている。口径4.3cm、器高2.5cm。

坏C（3）　口径10.6cm、器高3.7cm、高台径7.9cm。体部の調整はミガキa、底部外面は回転ヘラケズリ。2SX054上面の表土中出土。8C前・中半。

椀C（4）　高台径10.4cm。体部内外面及び底部内面はミガキa、体部外面最下部から底部外面にかけて回転ヘラケズリを施す。2SX054上面表土中出土。8C中・後半と思われる。

銅　製　品

2は板状銅製品の残欠で四辺の全てを欠失し本来の形状は全く知り得ない。現存長2.3cm、現存幅0.9cm、厚さ0.08～0.1cmを測る。中位以下が若干返っ

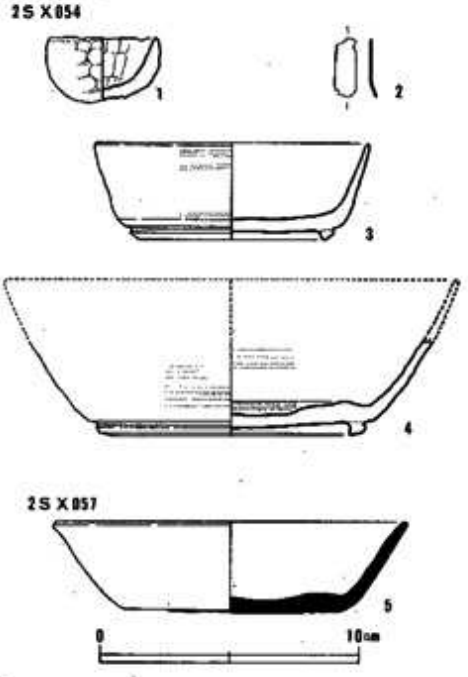


Fig.29　2SX054・2SX057 出土土器実測図

ているが後に変形したものか否かは決定し難い。

2ＳＸ057出土土器（Fig.28、Pla.18）

須恵器

坏ａ（５）　埋土上面に破損していたものの正位で供献されたような状況で出土した。口径13.8cm、器高3.4cm、底径8.3cm。底部と体部の境は不明瞭で丸い。底部外面はヘラ切未調整、他は風化が著しく判別できない。８世紀中・後半と思われる。

(4)　９　号　墓

① 立　地（Fig.25、Pla.10）

７・８号墓の在る丘陵の東側は緩やかに傾斜し、谷部に至る付近の傾斜変換部を約12mにわたって簡単に斜面を造成し、その中央部付近に墓壙を穿っている。

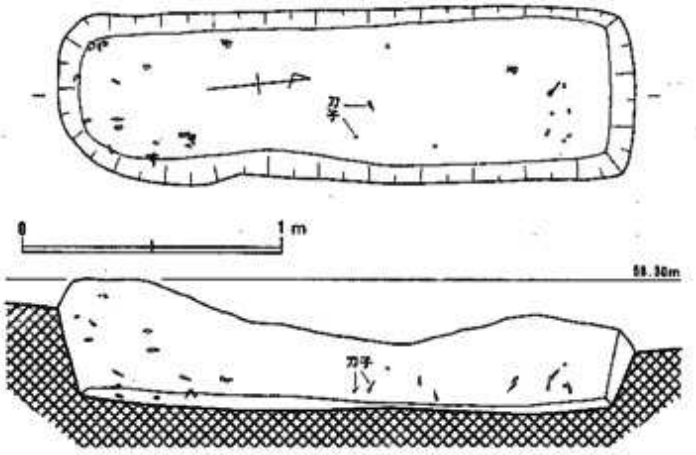


Fig.30　９号墓実測図

② 遺　構（Fig.30、Pla.11）

墓壙は長さ2.2m、幅0.7m、深さ0.25～0.45mを測る隅丸長方形で北小口が南小口に対してわずかに幅が広い。内部には鉄釘を使用した木棺を埋置したものとみられる。釘は29本検出し、床面付近の一部を除いて遊離しているが、南北の小口付近に集中して検出された。この釘の位置から推定して木棺は長さ約1.75m、幅約0.40mほどに復原できる。

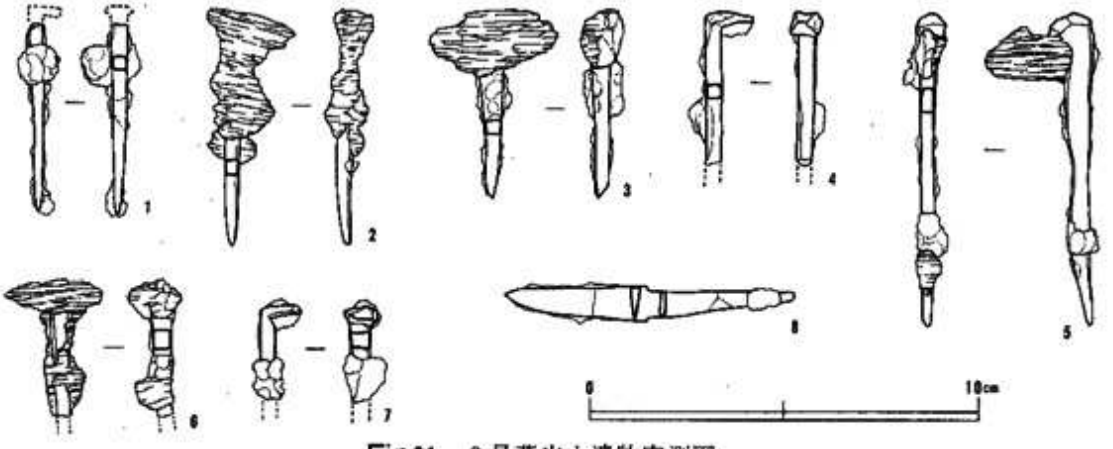


Fig.31　９号墓出土遺物実測図

遺物は墓壙中央付近と思われる埋土中から刀子１本を検出した。棺内副葬品か棺外供献品かの判断は困難である。

③ 出土遺物（Fig.31、Pla.17）

鉄 製 品

釘（１～７） 長さ6.1～8.1cm、茎部幅0.4～0.5cm。頭部は偏平である。全体に木質がよく遺存しており、６の資料から棺材の厚さは2.5cm程度であったことが知られる。

刀子（８） 長さ7.5cm、刃部長3.7cm、刃部幅1.0cm、柄部最大幅0.7cm、最大厚0.3cmを測る。

(5) 10 号 墓

① 立 地（Fig.３）

古墳の点在する丘陵の基部近くで、尾根頂部よりやや降った南斜面に位置する。

② 遺 構（Fig.32、Pla.13）

長径0.63m、短径0.59mを測る歪な円形を呈し、深さ約0.25mで底は２箇所に窪みを有し平坦ではない。埋土は数層に分層できるが、大半は炭化物を多く含む黒色炭層である。上部にはその標式として７個の栗石が配されている。なお石を配した面と黒色炭層との間に淡灰茶色土が認められ、当初は若干の盛土が存在していたことを物語っている。

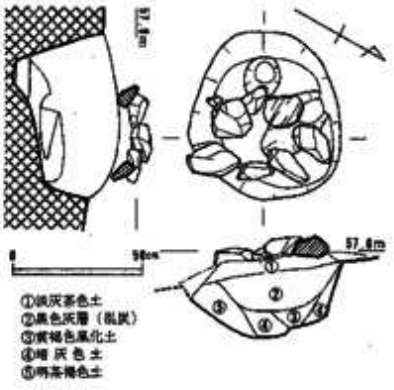


Fig.32 10号墓実測図

遺物は、埋土中から鉄釘とみられる破片２点と、配石上面に須恵器坏ａ１点を検出した。坏ａは直接関連しない可能性もある。

③ 出土遺物（Fig.33、Pla.17）

須 恵 器

小坏ａ（１） 口径9.4、器高2.3cm、底径6.7cm。底部の境は明瞭である。底部外面はヘラ切り未調整。８世紀代と思われる。

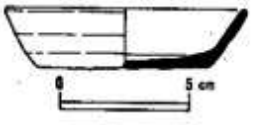


Fig.33 10号墓上面出土土器実測図

(6) 火葬施設（Fig.20・34、Pla.14）

① 遺 構

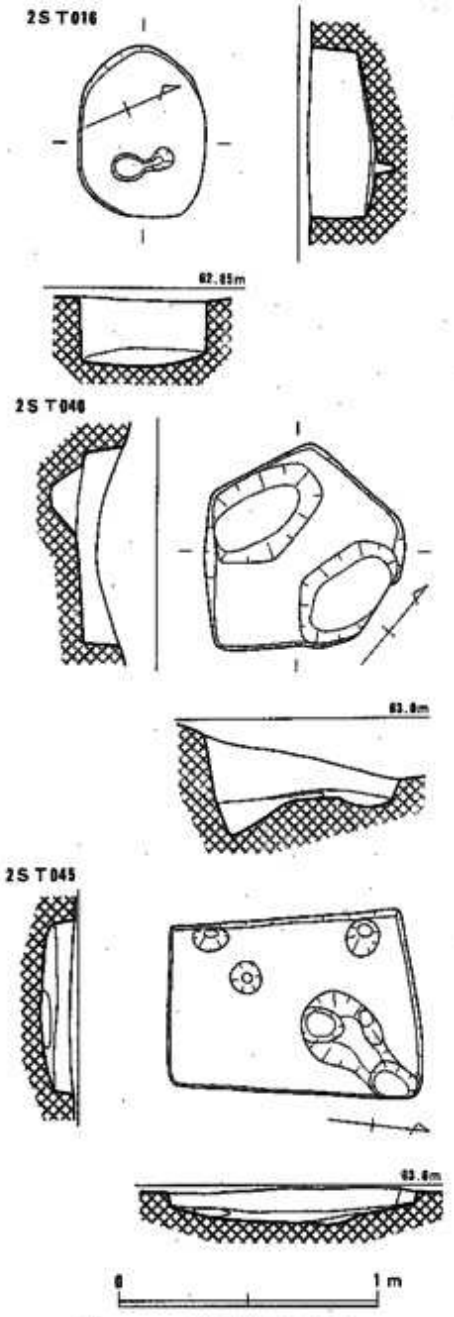


Fig.34　火葬施設実測図

2ST016

0.65m×0.5mで深さ0.25mの不整円形状を呈する遺構で、壁の一部が焼けている。

2ST040

平面五角形を呈するもので一辺は約0.4～0.6mを測る。東西に各1個の凹状のピットを有している。壁は全面焼けていた。

2ST045

0.95m×0.7m、深さ0.1mで北東隅がやや張り出す長方形状を呈している。床面に小ピットが存在する。壁の一部に焼痕をとどめていた。

全て出土遺物はなかった。

2ST046、047(Fig.20)も火葬施設の可能性がある。

〔3〕その他の遺構と遺物

① 遺　構 (Fig.20)

2SX009 (Fig.20)

5号墓の在る平坦部の南側にみられる凹み状の遺構である。後世の段造成で北側を失う。南北6.2m、東西5.0m分を検出した。

2SX028 (Fig.20)

8号窯などのある丘陵頂部に穿たれた1.0m×0.5mのピットである。

2SX055 (Fig.20)

6号墓のある丘陵の東側斜面中位に位置する小ピットで、径0.4mを測り、内部に土師器甕を埋置するが、遺憾ながら調査中に荒らされ詳細は知り得ない。

2SX048 (Fig.25)

7・8号墓背後の丘陵頂部近くにある凹み状の遺構で、埋土中より緑釉陶器片を採集した。

2SX031 (Fig.20)

8号窯のある丘陵の頂部付近に設けられた土壙状遺構である。長さ2.4m、幅1.4mを測り2段に穿たれる。下段は長さ1.5m、幅0.9mで、最深部は深さ0.45mである。

② 遺 物

2SX009出土土器（Fig.35）

土 師 器

小皿a（1） 口径10.2cm、器高1.6cmで底部は丸い。底部外面はヘラ切未調整で板状圧痕がある。11世紀後半の大宰府で主流をなす形式である。

2SX028出土土器（Fig.35、Pla.18）

土 師 器

小甕a（3） 口径17.4cm、器高13.0cmで平底に近い底部を有する。体部は直立気味にたち上がり口縁部は折り曲げによる。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテ方向のハケ目、体部内面は下から上へ向かうヘラケズリである。

他に土師器高坏の残欠を検出している。

2SX048出土土器（Fig.35、Pla.18）

緑 釉 陶 器

皿（2） 径8.2cmの蛇目高台を有する。胎土は土師質で明茶白色を呈し若干の小砂粒を含んでいるが精良なものである。内外面ともに施釉され、明黄濁色に発色し光沢がある。同一個体とみられる小片を3片検出している他、須恵器甕の小片、瓦片を検出した。

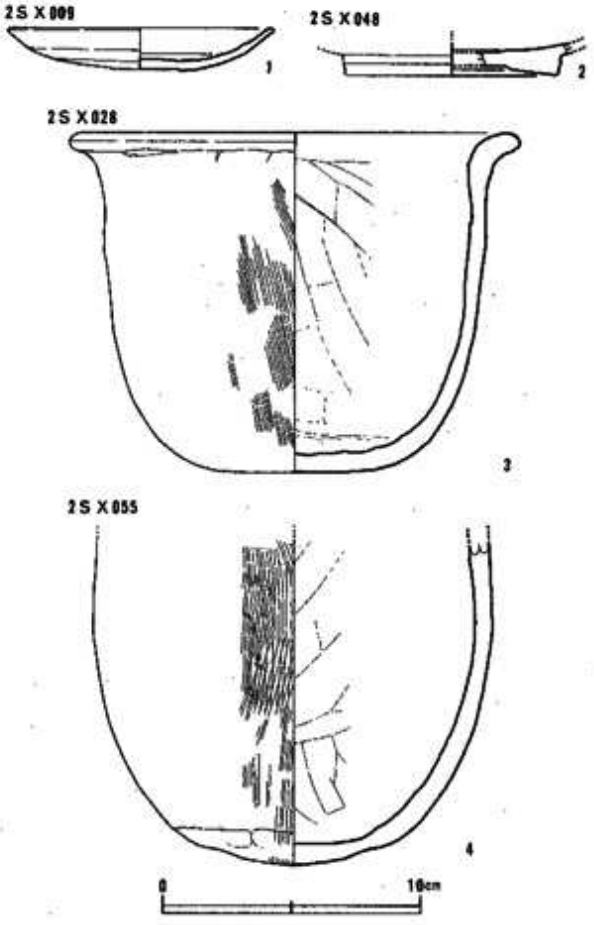


Fig.35 各遺構出土土器実測図

2SX055出土土器（Fig.35）

土 師 器

甕a（4） 口縁部を失う。胴部最大径15.4cmを測り丸底である。外面はタテ方向のハケ目、内面は下から上へ向かうヘラケズリである。

表土出土遺物（Fig.36、Pla.18・19）

縄 文 土 器

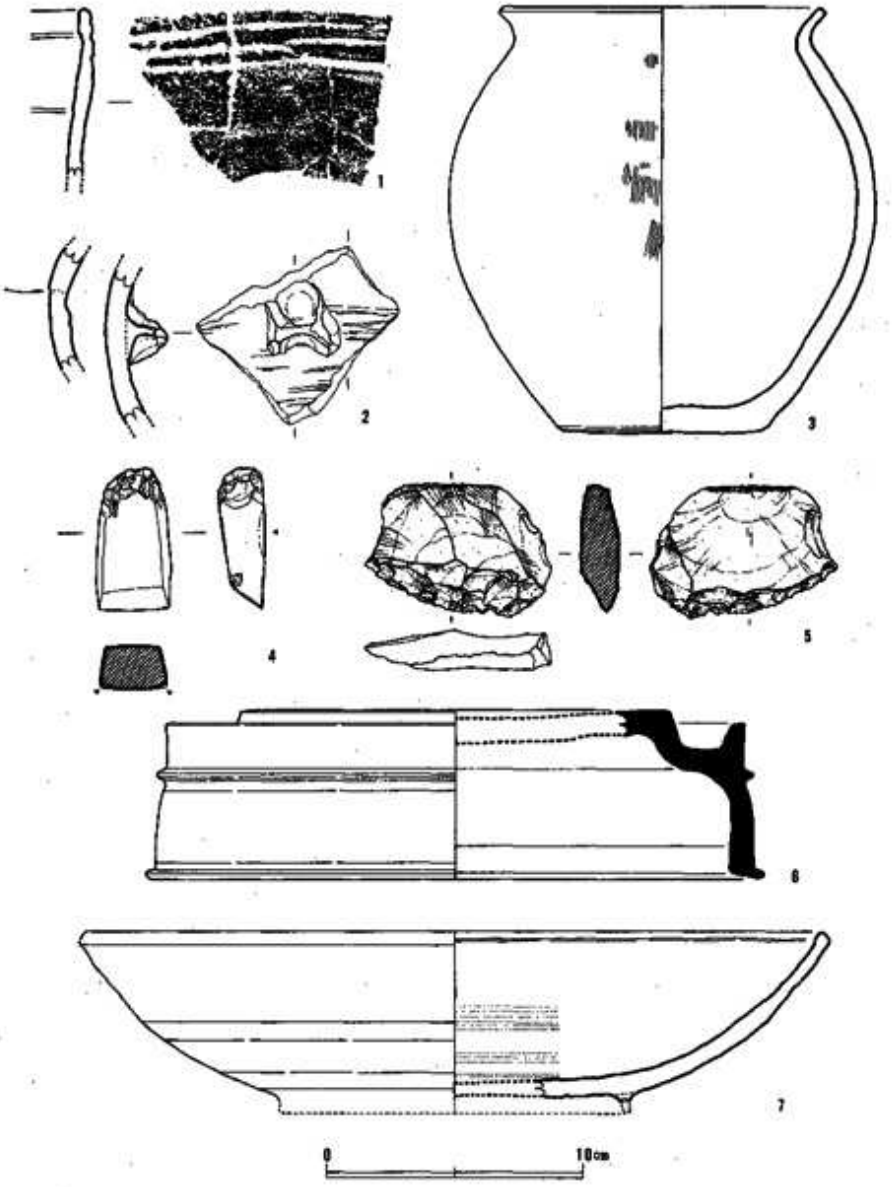


Fig.36　表土出土遺物実測図

粗製深鉢（1・2）　1は口縁部片でわずかに外面へ開くものと思われる。外面上位には粗雑化された3条の弧線文を配する。6号墓の在る丘陵北斜面出土。2は胴部（屈曲部）の残欠である。屈曲部外面にリボン状の突起を貼り付ける。外面の屈曲部以下は二枚貝の腹縁によるとみられるヨコ方向のナデが施される。古墳群の展開する丘陵東端の斜面中出土。1は縄文晩期前半ごろ、2は縄文晩期中葉ごろの所産とみられる。

弥生土器

甕（3）　口径12.6cm、器高16.4cm、底径8.1cm、胴部最大径16.4cm。平坦な底部からたち上がる体部は中位に最大径をもち内彎しつつ口縁部に至る。全体に風化が進んでいるが外面の一部にタテ方向のハケ目がある。

石　　器

4は圭質泥岩を用いた片刃石斧である。扁平と柱状の中間的形態を呈している。刃先はやや鈍化するが、刃こぼれはみられない。基端部は複数回の衝撃により欠損し、原形を保っていない。刃面のない側の面で、その中位の両サイドに欠損して磨耗した部分が見られ（図中◀）この部分が束縛位置であると推定される。この束縛痕の位置は、抉入柱状片刃石斧の抉りが刃面の対面にあることと矛盾しない。7・8号墓の在る丘陵先端の谷部表土出土。5は安山岩を素材とする肉厚の横長剥片を利用するもので、打面には原石の表皮を残している。刃部は横に長い下端部を両面から不規則に打ち欠いて作り出している。これは、縄文後・晩期以降の北部九州でよく見られるタイプの刃器である。8号墳表土中出土。

須　恵　器

円面硯（6）　小片であるが底部復原径24.0cm、高さ6.5cmを測る。山部上面と底端部をヘラケズリする他はヨコナデである。海部外側の突帯は貼り付けによる。透しは無いものと思われる。5号墓の西側丘陵東斜面中出土。7世紀と思われる。

土　師　器

盤C（7）　口径29.2cmを測り高台部を失うが、器高はおよそ7.0cm、高台径はおよそ14.0cmになるものとみられる。円彎気味の体部を有し、口縁内面に軽い稜を有する。端部は丸味を帯びる。体部内面及び外面上半はミガキa、外面中位以下及び底部外面は回転ヘラケズリされる。6号墓の在る丘陵北斜面出土。8世紀後半と思われる。

Ⅳ. 調査のまとめ

Ⅲ章で報告した主要遺構の、調査における所見を略述してまとめとしたい。

〔1〕古　　墳

造営時期

今回の調査で検出し得た土器群は質量共に乏しく具体的な年代を決定し得るとまでは言えないが、いくつかの資料からおよその年代を求めることができる。

まず9号墳主体埋土中出土の長頸壺は、那珂川町油田4号墳周溝内出土資料[1]や峠山1号墳出土資料[2]などに近似するものを求めることができる。峠山1号墳は柳田康雄氏の説くⅡa期[2]に該当する。9号墳西裾部検出の壺は、宮ノ本5号墳出土資料[3]や西新町遺跡D地区第1号住居跡出土資料[4]に近似する。また複合口縁の甕は同じく西新町遺跡D地区8号住居跡資料[4]に類例を求められ、壺・甕ともに常松幹夫氏の言う西新町Ⅲ式[5]に該当する。

8号墳出土の小型丸底壺は春日市原2号墳出土資料に類似する。

類例を求め得た資料から推察すれば宮ノ本古墳群出土の土器群はおおむね西新町Ⅲ式の土器群や柳田Ⅱa期の土期群に含まれてくるものと考えられる。こうした点から本古墳群の造営時期は所謂「布留式」の古相段階に位置付けられるものと思われる。

墳丘・周溝・主体部

墳丘は9号墳が高さの上で最も高いが盛土の量は少ない。他の3基は低墳丘であり盛土の量もごくわずかである。盛土の状況は特徴的ではなく版築状の積土も認められず、第1次調査で検出した1～6号墳の状況と同じである。

周溝は7・8号墳は明瞭に遺存するが9号墳ではその存在を明確にし難く、10号墳の場合は東側が流出しているので明らかではないが、西側には存在する。しかし、全ての周溝は

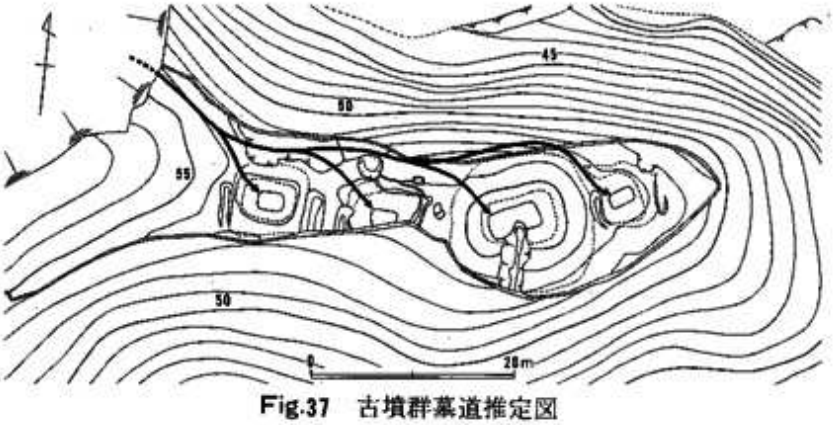


Fig.37　古墳群墓道推定図

北西隅部で立ち上がり当初から穿たれた形跡はなく陸橋的施設として故意に掘り残された可能性が強い。さらにこれと対応するかのように主体部掘方の輪郭が北西隅で若干ではあるが乱れていたことと併せると、陸橋部を通り主体部北西隅から遺体を埋葬する行程を想定できる。このことから丘陵北側（造成により旧状は知り得ない）に各古墳へ通じる一連の墓道の存在した可能性が強いと考えられる。(Fig.37)

最後に主体部の構造であるが、最も大きい9号墳は割竹形木棺粘土槨、7・10・11号墳は箱式石棺、8号墳は石蓋土壙を主体部としている。これらと同時期の造営と考えられる油田古墳群[1]や炭焼古墳群[7]とは主体部の在り方の上で類似する傾向があり、宮ノ本古墳群はこの時期の古墳群の典型的な様相を呈するものと考えられる。

〔2〕墳　　墓

各遺構ごとに略述する。

5　号　墓

近似例は火葬施設の一群に見受けられる。篠振遺跡ＳＴ026[8]や剣塚2号火葬墓[9]、干隈2号火葬墓[10]はその好例である。5号墓の場合、焼壁は認められないものの周辺には2ＳＸ016、2ＳＸ040が存在し、その立地からも火葬施設として捉えた方が妥当かも知れない。またこの5号墓から検出された釘の形状は6号墓検出の釘と同様に折り曲げられており、使用方法の近似に興味の持たれるところである。

造墓の時期について知ることのできる資料は検出されておらず詳細は不明と言わざるを得ないが、火葬施設の一群として捉えることが可能であれば中世中期～末期の所産である可能性が強い。

6　号　墓

特殊な形状に変形させられた釘を使用する木棺墓で、釘は四隅にのみ用いられたようである。釘の出土状況は原位置を保持しておらず、また釘の打ち込み方法に一考を要するため棺の復原には至っていない。ただ土壙の法量からみて、屈曲させた屍体か座位に近い状況の屍体を埋葬したものと考えられる。

造墓の時期を決定する遺物に乏しいが、釘の形状が先述の5号墓に近似しており、それに近い時期を考えておきたい。

7　号　墓

把手付短頸壺の例として太宰府近郊では結ヶ浦火葬墓[12]が著名である。和同開珎を伴って出土しており、和銅元年（708）以降の奈良時代前半と考えられている。同タイプの壺で具体的な年代

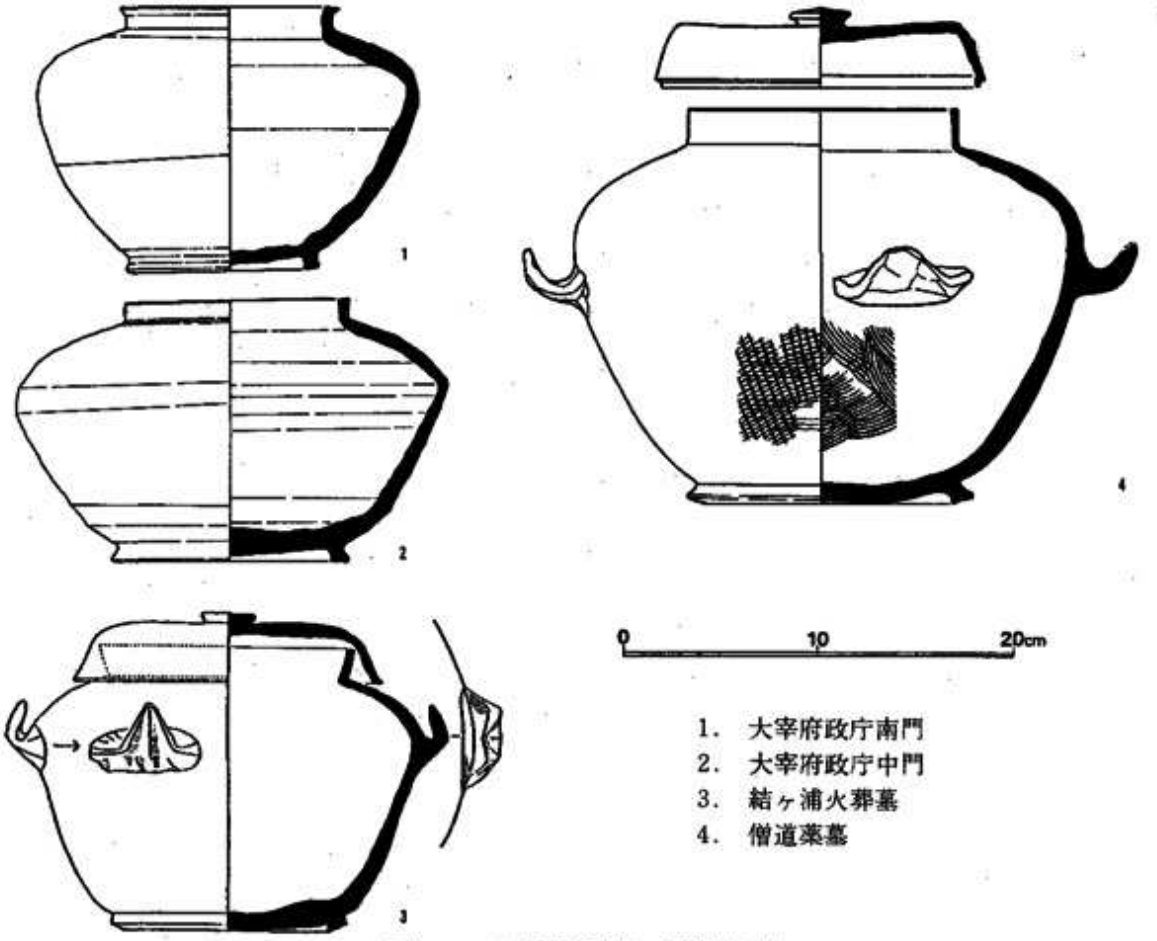


Fig.38 須恵器短頸壺の諸例（1/4）

が知れる資料としては、僧道薬墓[13]がある。共伴する墓誌の銘文に和同7年（714）とあり、この形式の存在する一つの時期を示唆するものである。この両者と比較すると、本例は把手の位置、口縁部の形状などで結ヶ浦火葬墓例にかなり近似している。道薬墓例は高台が外方にかなり張り出し古い様相を呈しているが、7号墓のそれは台形状の小さなものになっており、若干後出する可能性が考えられる。

把手のない短頸壺の資料では大宰府政庁中門・南門から各々検出[14]されており、なかでも中門の資料は調整や形態の上でかなり近似する要素を求めることができる。これらの壺は8世紀前半から中頃と考えられている[15]。(Fig.38)

上記の所見から7号墓は8世紀前半から中頃に造営されたものと考えておきたい。

8 号 墓

須恵器長頸壺の例は大宰府政庁中門跡出土のものが著名である。これと比較すると法量の上ではほとんど変わらないものの仔細な点で若干の異なりをみせている。頸部に配される沈線や口縁

外面の小さな段の有無、高台の形状などが掲げられ、８号墓の資料は若干繊細的な製作手法が窺える。ただし、これをもって時期差とするのは困難であり、中門出土資料とおおむね同時期と考えて差し支えないと思われる。

蓋に転用されている土師器埦ｃは直接該当するような資料は見出せないが、大宰府史跡ＳＤ2340下層出土の坏[16]と比較すると宮ノ本８号墓資料の方が体部を内彎気味につくり、調整も丁寧な手持ちヘラミガキを施すなど若干古い要素をもっているものと思われる。また条坊19ＳＸ075[17]出土の埦ｃは下半のみの残欠であるが、形態の上で８号墓資料に通じるところがある。条坊19ＳＸ075は８世紀前半から中頃に考えられており、大宰府史跡ＳＤ2340もおおむね同時期かやや降る程度のものとみられている。これらの点から８号墓の造営を８世紀前半から中頃と考えておきたい。

２ＳＸ054

７・８号墓と一体に捉えられるテラス状遺構である。造墓に伴い造営されたことは明らかである。これと同様の形状を示すものに宮ノ本１・２号墓に伴うとみられるテラス状遺構[18]（以下宮ノ本１次テラスと略称する）と篠振遺跡ＳＸ010[8]が知られる。

宮ノ本１次テラスは各墳墓の造営に伴い随時設営されたものとみられるが[19]、全てを併せるとかなりの規模で造成されていることがわかる。この造成はその墳墓の年代の検討によって８世紀末葉から９世紀後半までの間に造られたものとみられ、形状や遷地を考慮すると９世紀中頃まで下限を遡らせることができよう。

篠振遺跡ＳＸ010はそのテラス部分に展開される火葬墓など諸施設と出土土器から、おおむね８世紀代の所産とみられる。(Fig.39)

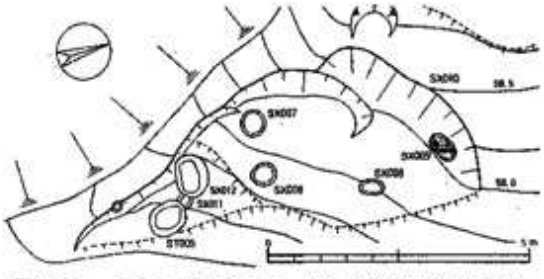


Fig.39　テラス状遺構の一例（篠振遺跡ＳＸ010）

この２ＳＸ054も７・８号墓の年代から８世紀前半から中頃に造営されたものとみられ、前例と年代の近似することは注目されよう。

遷地についても上記３例は近似する。いずれも丘陵頂部に造営されず、山頂部を見ることのできる丘陵中位に設営され、方向は全て平野部又はそれに通じる谷部（墓道の存在を予想できる）に向いており、前方は開けている。こうした遷地の状況は奈良県太安萬呂墓にもみることができ、同時代の共通性を窺うことができる。

さて、この２ＳＸ054をはじめとするテラス状遺構であるが全て造墓に伴う墓域設定作業の一段階であり、他地域に今後検出される可能性も多分に考えられるが、現段階では大宰府最盛期における造墓の特色として捉えておきたい。各墳墓は、葬法において土葬・火葬の異なりをみせているにもかかわらず一貫して類似施設を伴っている事実も興味深く、今後この時代の葬送を考える上で重要な視点になるものと思われる。

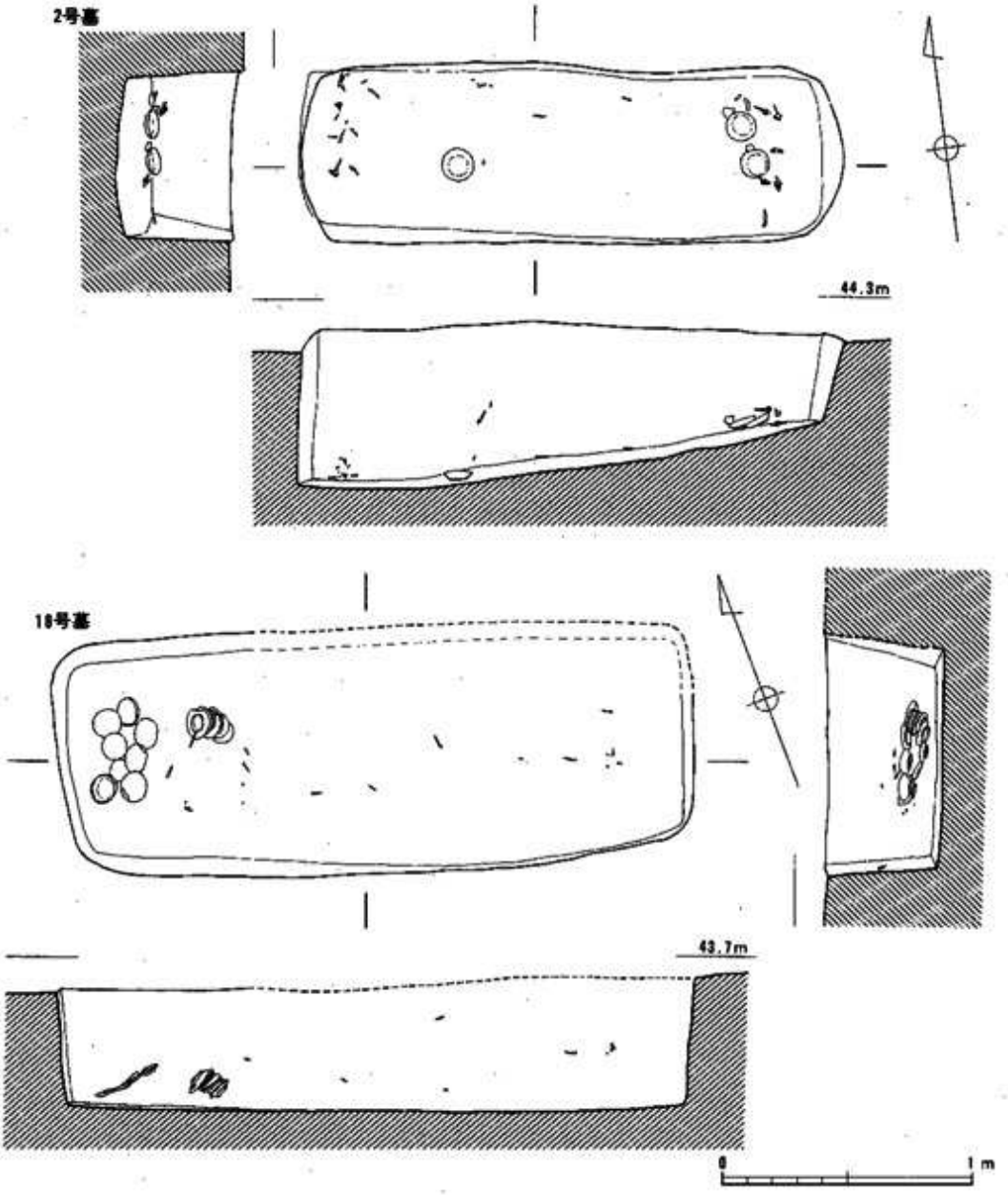


Fig.40　君ヶ畑遺跡木棺墓（報告書掲載図を一部改変）

9　号　墓

太宰府における歴史時代の木棺墓は７世紀後半頃から12世紀後半ごろまで知られている。９号墓の場合、時期を決定し得る遺物が検出されなかったため他の類似遺構をもってその造営年代を推定してみたい。

まずこの遺構の特色として造墓に先立ち斜面をごく簡単ではあるが段造成することと、多量の鉄釘を用いて棺を作る点とにあると思われる。

造墓に先立つ造成については前項に記したとおり8～9世紀の大宰府において知られるところであり、9号墓もこの類として捉えられるものと判断される。ただ他例に比較して規模は大きいながら主体となる墓に伴うテラス部分が小さく、簡素になっている傾向が窺われ、前例のものより後出する可能性を考えておきたい。

鉄釘については9号墓と同様に30本近い釘を使用する例が大宰府でいくつか知られている。君ヶ畑2号墓[20]は27本検出され棺長1.80m、棺幅0.47m、同18号墓では25本検出され、棺長1.50m程度に推定されている。各々の墓はその出土土器から2号墓が9世紀中頃、18号墓が9世紀後半に位置付けられている。(Fig.40) また宮ノ本2号墓[3]では38本検出され、棺長1.90m、棺幅0.42mと推定されている。同3号墓では50本検出され棺長2.00m、棺幅0.60mと考えられている。2号墓は8世紀末から9世紀初頭、3号墓は9世紀中頃から後半と考えられている。さらに原遺跡SX01[21]は、鉄釘60本を使用し且つ竪穴式石室という特異な形式の墓である。時期決定の要素を欠くが、近年の原遺跡の調査で原山無量寺造営以前は奈良時代から平安時代にかけての葬送の地であった可能性の強いことが知られつつあり、SX01もその範疇で捉えることが可能である。

以上の例からみて、鉄釘を多量に用いる木棺は9世紀を中心とした時期に考えることができ、この9号墓もおおむねそのころの造墓として捉えることができると思われる。

10 号 墓

配石と鉄釘の出土、立地などの点から火葬墓の可能性が強いものと推定される。配石上面から検出した須恵器は8世紀代のものであるが、直接関連するものか否かは決定し難しく造墓年代の推定は困難である。

火 葬 施 設

今次の調査では確実にそれと判断されるものは3基検出された。第1次調査ではSX04、05の2基が確認されている。いずれも丘陵上の一段下った部分（第1次調査では古墳の間、第2次調査では丘陵隆起間の平坦部）で検出されており、立地に共通性が見出せる。しかし近接する篠振遺跡や太宰府東辺の宝満山遺跡、太宰府天満宮後背地では尾根上に展開されるのが通例であり、宮ノ本遺跡とはやや異なった様相を呈している。いかなる理由によるものかは今明確にし得ないが、今後の資料の増加をまって検討していきたい。

〈註〉

(1) 渡辺正気・柳田康雄『油田古墳群』（那珂川町文化財調査報告書　第1集）1969

(2) 柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982

(3) 山本信夫ほか『宮ノ本遺跡』（太宰府町の文化財　第3集）1980

(4) 常松幹夫ほか『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ　西新町遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報

告書　第79集）1982

(5)　常松幹夫「北部九州における西新町遺跡の位置」　注(4)の文献所収

(6)　木下修ほか『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第２集　1976

(7)　柳田康雄ほか『炭焼古墳群』（福岡県文化財調査報告書　第37集）1968

(8)　山本信夫・狭川真一『篠振遺跡』（太宰府市の文化財　第11集）1987

(9)　石山勲ほか『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』―XXⅣ―　1978

(10)　井沢洋一『干隈遺跡』干隈遺跡調査会　1985

(11)　渡辺正気「和同銭副葬の一蔵骨器」『九州考古学』１号　1957

(12)　上野精志『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』―XX―1978

(13)　飛鳥資料館『日本古代の墓誌』1977

(14)　石松好雄ほか『大宰府史跡―昭和50年度発掘調査概報―』九州歴史資料館　1976

(15)　森田勉「大宰府の出土品③―土器・陶磁器―」『仏教芸術』146号　1983

(16)　石松好雄ほか『大宰府史跡―昭和58年度発掘調査概報―』1984

(17)　山本信夫『大宰府条坊跡Ⅲ』（太宰府市の文化財　第８集）1984

(18)　山本信夫「太宰府市の文化財」『大宰府の歴史』７　西日本新聞社　1986

(19)　本書付編参照

(20)　前川威洋『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第７集』1977

(21)　山本信夫『筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡』（太宰府町の文化財　第４集）1981

付　　篇

宮ノ本１～３号墓、年代の再検討

1.　３号墓出土黒色土器の年代観

①　黒色土器坏ｃの類例

宮ノ本３号墓出土

条19ＳＤ070上層出土

大70ＳＫ1800出土

②　坏ｃの型式と年代

③　大宰府周辺在地土器の形式と年代

2.　宮ノ本２号墓、土師器の年代観

3.　１～４号墓の構成順序

①　遺構上の比較

②　墓の位置

③　１号墓の年代観及び墓の造営順位に関する二、三の説

岸　俊男氏

高倉洋彰氏

④　墓の造営順位のまとめ

4.　宮ノ本１次調査、遺構の補足

１ＳＸ016

宮ノ本１～３号墓、年代の再検討

宮ノ本１次調査における１～３号墓の年代は、８Ｃ後半～10Ｃ前半と報告していた。[*1]最近、発掘調査で得られた資料から若干、年代の幅が狭められる可能性がでてきたので、ここで年代観の修正を行なっておきたい。

1.　３号墓出土黒色土器の年代観

①　黒色土器坏ｃの類例（Fig.41）

宮ノ本３号墓出土　１はＢ類（内外を燻す）坏ｃで内外面にミガキｃ（ジグザグに交叉する細いヘラミガキ）を加える。ミガキは細くかつ丁寧、緻密になされる。体部は直に近く開き、底部はヘラ切り後、高台が貼付けされる。体部最下位には少し屈曲をもつ。体部外面下方はヘラ削り後ヨコナデされ、高台部周辺はヨコナデされる。口径は12.0cm、器高は3.4cm。

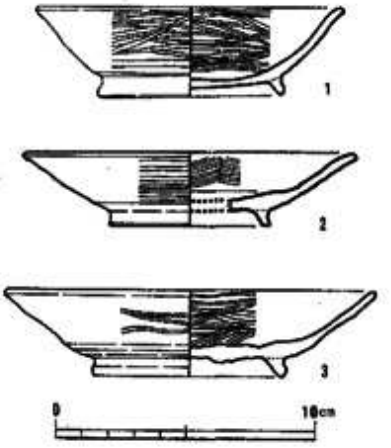


Fig.41　黒色土器坏ｃ
(1/3)
1. 宮ノ本３号墓Ｂ類
2. 条19SD070Ａ類
3. 大70SK1800Ｂ類

大宰府条坊跡19次溝ＳＤ070上層出土[*2]　２は内面のみを燻すＡ類。内面には細かいミガキｃ、外面にはミガキａ（回転を応用した平行のヘラミガキ）を施す。ミガキａは８Ｃ後半に多い手法である。体部は直線的で、器肉は薄く、口縁部、高台部などのつくりは細目であるがシャープである。口径12.9cm、器高2.9cm。共伴する在地の土師器、須恵器は大宰府Ⅴ、Ⅵ型の２型式およびⅤ～Ⅵのどちらかの型式に属するものがある。遺構の新旧関係、層位関係を考慮すると溝の埋没年代を示すのはⅥ型式である。

大宰府史跡第70次土壙ＳＫ1800出土[*3]　３はＢ類。皿として報告されている。ミガキは体部内面を密に、内底や体部外面は粗に行なっている。体部は直線的であるが最下位に少し屈曲をもつ。口径14.0cm、器高3.3cm。共伴する在地の土師器、黒色土器は多く、Ⅶ型式に属する。

②　坏ｃの型式と年代

宮ノ本３号墓の坏ｃは上記ＳＫ1800に近くⅦ型式に属する。Ⅵ型式の19ＳＤ070出土坏ｃは、形態、手法、つくりの繊細さなどすべての点からみてⅦ型式のＳＫ1800より古い特徴を有する。また、このような特徴をもった黒色土器はⅧ期以降は例をみない。先の報告では、これらの類例に乏しかったので、一例として土師器坏ａの法量と器形に注目して３号墓坏ｃの年代を上限９Ｃ

中頃～下限10C前半と推定した。今回の検討によって９Ｃ中頃～９Ｃ後半に年代が限定される事になる。*4

③　大宰府周辺在地土器の型式と年代（tab.１）

在地土器（土師器・須恵器）型式については下記のように分類、整理される。

tab.１　大宰府型式と標式遺構、推定年代の一例

（＊1986山本作製）

型　式	標式遺構	関係遺構	推定年代　C…century
大宰府　Ⅴ	大43　ＳＥ1081	大43　ＳＫ1084	８Ｃ後半～末 または800年前後
Ⅵ	大18　ＳＥ400	（宮ノ本　２号墓） 条19　ＳＤ070 筑６　ＳＫ053 大46　ＳＥ1340	９Ｃ前半　（初頭～中頃）
Ⅶ	大70　ＳＫ1800	筑５　ＳＫ045 （宮ノ本　３号墓）	９Ｃ中頃～後半
Ⅷ	大35　ＳＫ678	南・君畑18号墓 条15　ＳＫ075 条15　ＳＤ010 条24　ＳＫ115 大96　ＳＥ2845 条17　ＳＥ002	９Ｃ末～10Ｃ初頭 または900年前後
		条16　ＳＫ090 ＳＫ089 大74　ＳＤ205Ａ ……	延長５（９２７）
Ⅸ	大34　ＳＫ674 大65-2　ＳＥ1558	筑　土壙１	１０Ｃ　中頃

（凡例）　大…大宰府史跡・九州歴史資料館の調査　　筑…筑前国分寺跡
南…南バイパス（条坊跡）・県文化課の調査　　条15　ＳＫ075…条坊15次の遺構番号ＳＫ075（土壙）
条…大宰府条坊跡・太宰府市の調査

2.　宮ノ本２号墓、土師器の年代観

出土した土師器、須恵器の法量、手法、形態から、Ⅴ型式の可能をもつもの（前回報告で(Ⅱ)としたもの）とⅥ型式（同様に(Ⅰ)としたもの）に分類可能であるが、全体的にはⅥ型式に考えられる。この点は以前の見解と異なるものではない。ただし現在は fig.１のようにⅤ型式の８Ｃ後半を→８Ｃ後半～末、Ⅵ型式の９Ｃ初頭→９Ｃ前半に年代観の修正を行なったので上限は８Ｃ後半、下限は９Ｃ前半となる。またⅥ型式単独と推定すると９Ｃ前半のごく短期間に限定が可能であろう。

3. 1～4号墓の構成順序（Fig.42）

1～4号墓は造成されたテラス状の平坦面（幅5m、長さ20m）に営まれる。その配置はfig.42に示される。1号墓はテラスの西側、4号墓は1号墓の下、2号墓はテラスの中心に近く、3号墓は東端部に位置する。西から東へ1・2・3号墓は一列に並ぶ。

4号墓は火葬蔵骨器から8C中頃に推定可能である。1号墓は4号墓より新しいので8C中頃以降となる。1号墓の共伴土器は無い。1・2・3号墓の遺構のうえでの重複関係はない。2・3号墓の年代は共伴土器から、前述のように押さえられる。共伴遺物などから推定される墓の構成順位は4号墓→1号墓、4号墓→2号墓→3号墓で、その関係は事実である。問題となる1号墓の順位は遺構の重複関係においてこれ以上つめることは困難である。1～4号墓の順位は、次の数通りが考えられる。4→2→3の関係は固定しているので、

ⓐ4→1→2→3

ⓑ4→1・2→3（1・2が同時）

ⓒ4→2→1→3

ⓓ4→2→1・3（1・3が同時）

ⓔ4→2→3→1

ⓐ～ⓔの5通りが考えられる。

① 遺構上の比較

○火葬墓は1号・4号墓

○釘木棺墓は2号・3号墓

○外部施設、石積墳丘　　1号・2号墓

外部施設の点では1・2号は類似するが、内部主体については異なる。内部主体の関係では2号・3号墓の類似性がある。

② 墓の位置

テラスは一度に造成されたのか、墓の増加に伴って、一部拡張されたのか不明である。テラスの上方（北側）の段造成は1号・2号墓の規模と対応するかのように多少の出入りが観察される。2号墓の周辺空間は遺構の規模に応じて広く設定されているようである。このことからテラス造成は2次に及んだ可能性もある。

墓域を広くとり、墓地の中心にあたる墓は2号墓であり、その点を強調するならば他の1・3号墓より先行する可能性が与えられる。1号墓と3号墓の造営順位は不明であるが、1号墓は外部施設の構造、方位や墓域における墓の位置関係を考慮すると、2号墓と比較的接近した年代が与えられるので、3号墓より古くなる可能性がある。

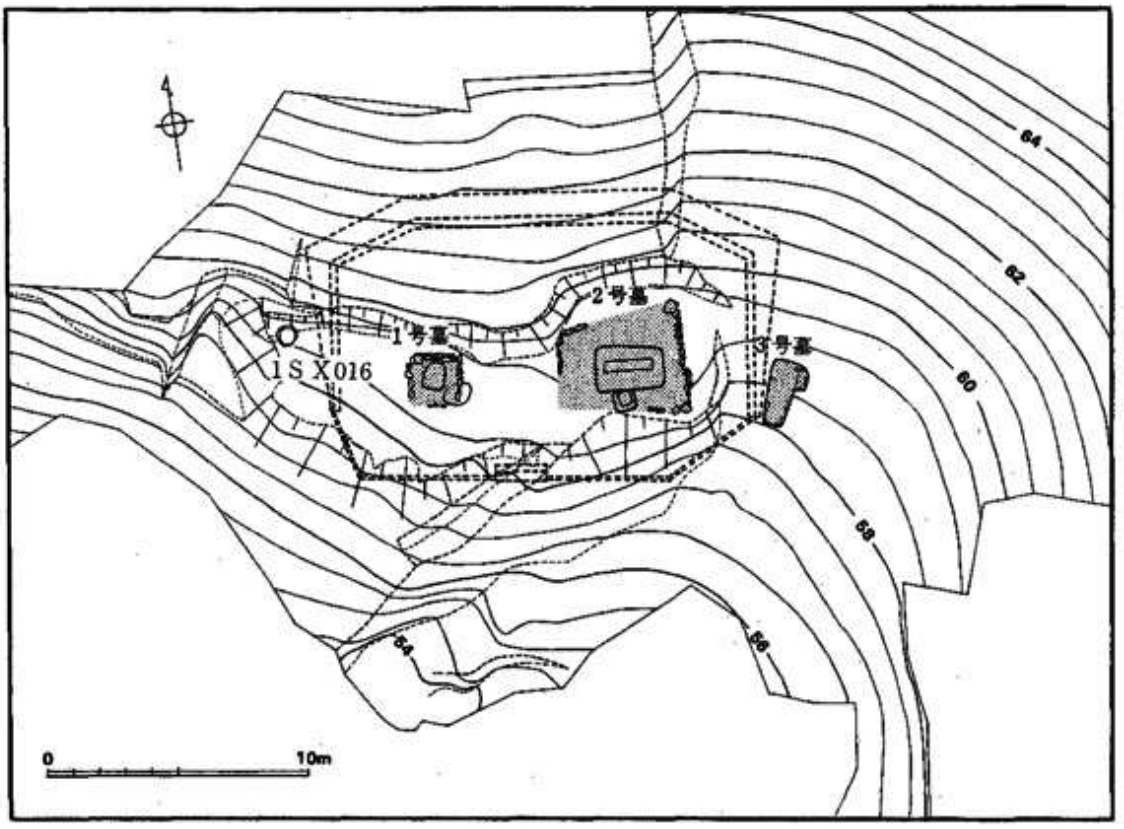


Fig.42　1～4号墓遺構配置図 "I" テラス範囲、保存部分

③　1号墓の年代観及び墓の造営順位に関する二、三の説

1号墓は重要遺物の買地券を出土したが、時期を確定できる共伴遺物はない。8C中頃以降という年代の上限が与えられているにすぎない。こうしたことから1号墓についていくつかの年代観が提示されている。

岸　俊男氏　買地券の銘文にある人物名、内容などと史料との比較から年代を推定された。その一部を引用すると「……好雄という人名は8世紀以前にはほとんどなく、また『好』という字が人名に用いられるのも9世紀中ごろ以降である。六国史を検すると『好雄』という人物は3人ほどみえるが、いずれも承和一貞観（834～876）ごろである。これらの点から推せば買地券は9世紀中ごろ以降のものとみられるが、承和7年（840）に亡くなった淳和上皇の御葬料として絹・調布・銭・鍬などが充てられているのは買地券の品名と一致し、興味深い。……」（毎日新聞　昭和54年12月8日夕刊）[*5]。岸氏の見解は、買地券銘文の背景から導き出された年代観であるため興味深い。上記のように1号墓を9C中頃（または前半）以降と仮定すると、墓の構成順位はⓒ4→2→1→3か、ⓓ4→2→1・3か、ⓔ4→2→3→1の3通りが考えられる。前節の1→3をとり入れればⓒ案が有力となる。

高倉洋彰氏　当時調査担当者の一人であった高倉氏は独自の解釈をとる。「(1号墓は) そうすると (9世紀中頃以降とすると) 墓は4→2→1または3号の順となり、右往左往のうえ火葬と土葬を繰り返すことになる。これは4→1→2→3号の順とみるべきである。そうすれば墓は西から東へ移り、火葬から土葬へと無理なく変化する」(図説発掘が語る日本史6　九州・沖縄編)。つまりこの意見によると1号墓の年代は8C後半を前後した頃となり、前掲した墓地構成順位のⓐ案に限定した考え方をとる。

④　墓の造営順位のまとめ

1～4号墓の造営順位は前掲のように数通りの解釈が可能であって、今のところ高倉氏の案は可能性の1つにすぎない。墓が西から東へ移動した調査の事実関係もえられていない。これまで分析したことのまとめに、別の仮説を一案あげておこう。①土器からみて4→1→3号墓の造営順位は誤りない。②外部施設の共通点や配列から1・2号墓は年代が接近している。③墓域における個々の墓の位置関係や占有状態では2号墓が中心的で1・3号墓より先行する可能性がある。④テラス状の造成は2次に及んだ可能性がある。⑤1号墓出土買地券文中の人名「……好雄」については史料から834～876年に類例があり、「好」字が人名に用いられるのは9C中頃(前半)以降。⑥「……雄」字の人名は神亀3年(726)の石上朝臣勝雄が最初で、以後も少ない。*6⑦史料、淳和上皇(840年亡)の御葬料に充てられた絹・銭・鍬の記事は1号墓買地券の品名と一致する。①～⑦を整理すると、墓の構成順位はⓒ4→2→1→3号墓の案がもっとも確率的に妥当ではないかと思われる。しかしこれも可能性の一案であることを断言しておきたい。*7

4．宮ノ本1次調査、遺構の補足

(Fig.43・44)

前回の報告で欠落していた遺構の補足説明を行なっておく。

1SX016　1号墓の西側5mに位置し、墳墓群と関係すると思われる。円形ピットで南北方向の直径は0.77m、深さは0.20m弱。全体に5～17cm大の小礫をつめていたが、調査中に盗掘をうけ小礫の一部は抜き取られた。1～4号墓を造る際に造成したテラス平坦面の最西端に位置する。遺物は出土していない。

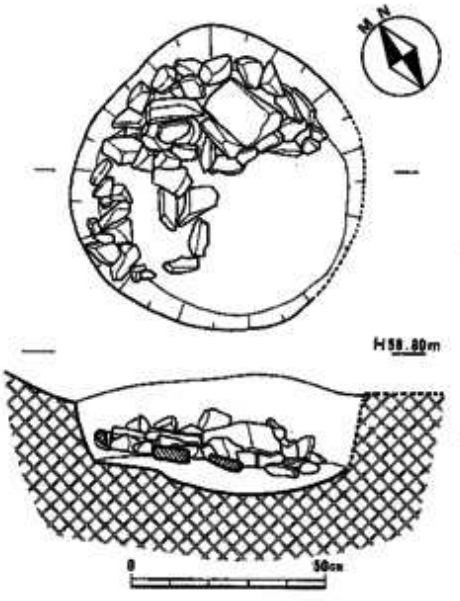


Fig.43　宮ノ本1SX016 (1/20)

＊1　山本信夫・高倉洋彰・横田義章・中間研二　「宮

ノ本遺跡」『太宰府町の文化財　第3集』P44［2］遺構のまとめ　1980　太宰府町教育委員会

＊2　山本信夫・狭川真一他　「大宰府条坊跡Ⅲ」『太宰府市の文化財　第8集』P36　Fig.29　1984　太宰府市教育委員会

＊3　九州歴史資料館『大宰府史跡　昭和56年度発掘調査概報』　1982

＊4　黒色土器・瓦器の総体的編年については、森田勉「筑前型瓦器椀の成立過程」『古文化談叢　第14集』1984参照。

＊5　岸俊男『遺跡・遺物と古代史学』　1980　吉川弘文館発行に再録されている。

＊6　前掲書5、P110　追記参照。

＊7　山本信夫「太宰府市の文化財」『大宰府の歴史7』　1987において若干、この問題に触れている。

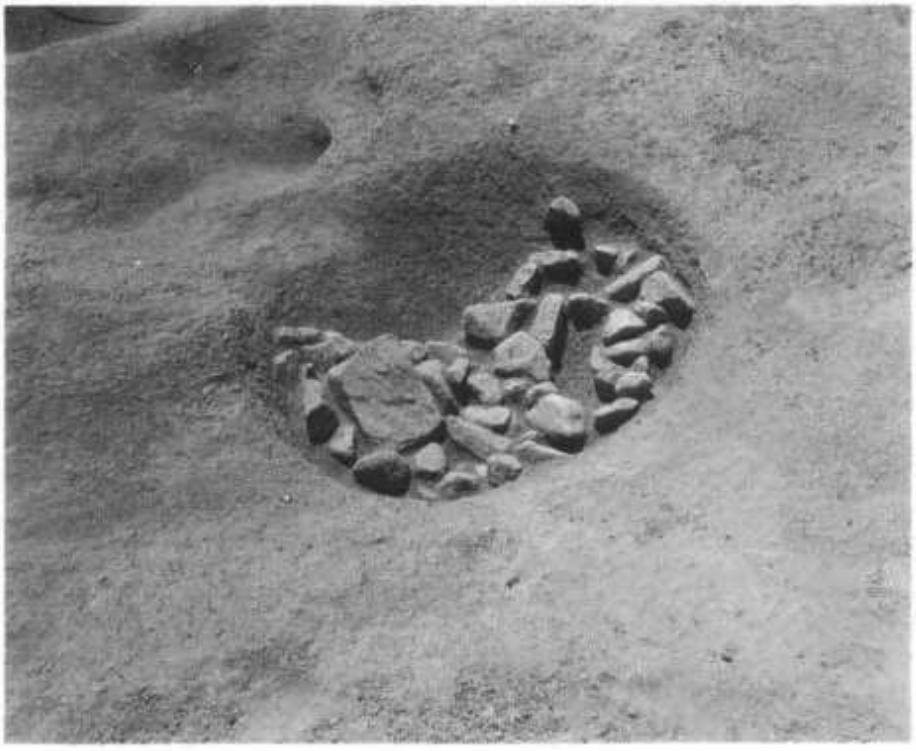


Fig.44　宮ノ本1SX016（北から）

図　　版

古墳群調査前全景（空中写真）

古墳群調査後全景（空中写真）

古墳群調査後全景（空中写真）

7号墳全景（空中写真）

7号墳主体部
粘土被蓋状況

粘土除去後

石蓋除去後

8号墳全景（空中写真）

9号墳全景（空中写真）

8号墳主体部
粘土被蓋状況

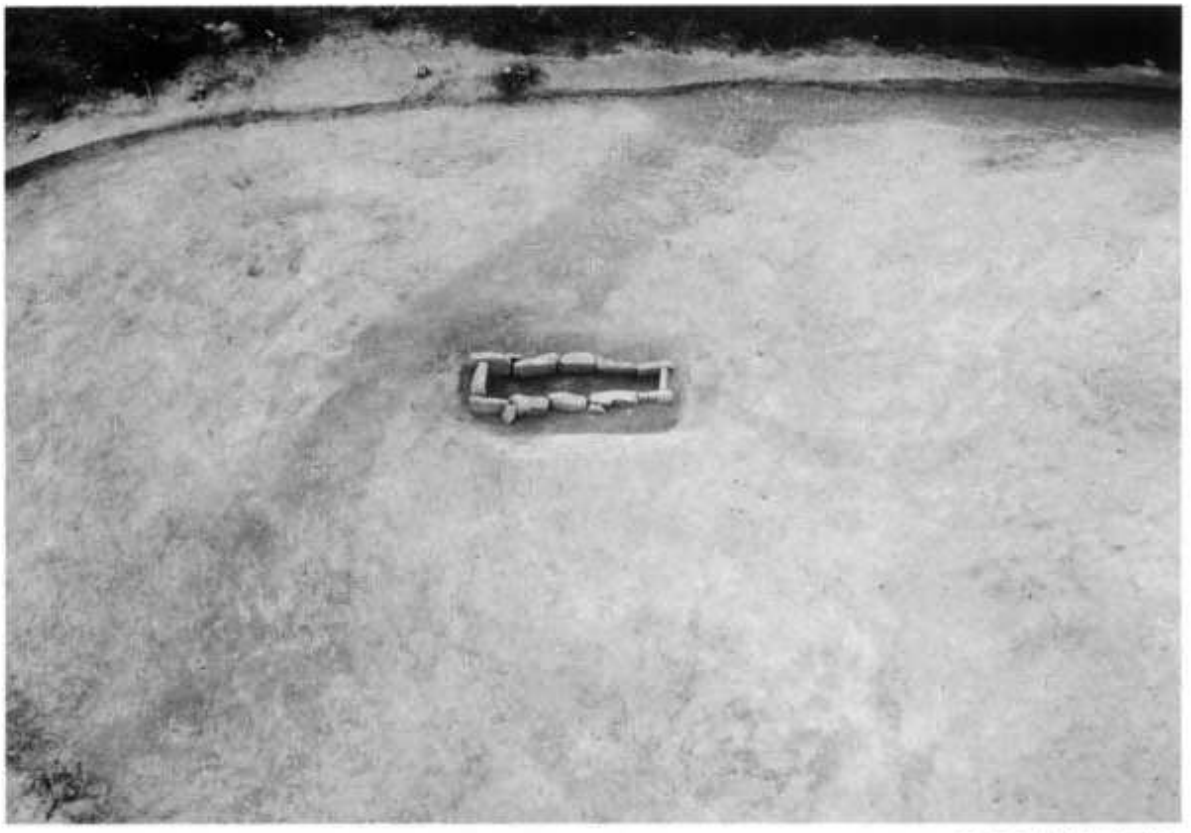
8号墳主体部
粘土除去後

8号墳主体部
石蓋除去後

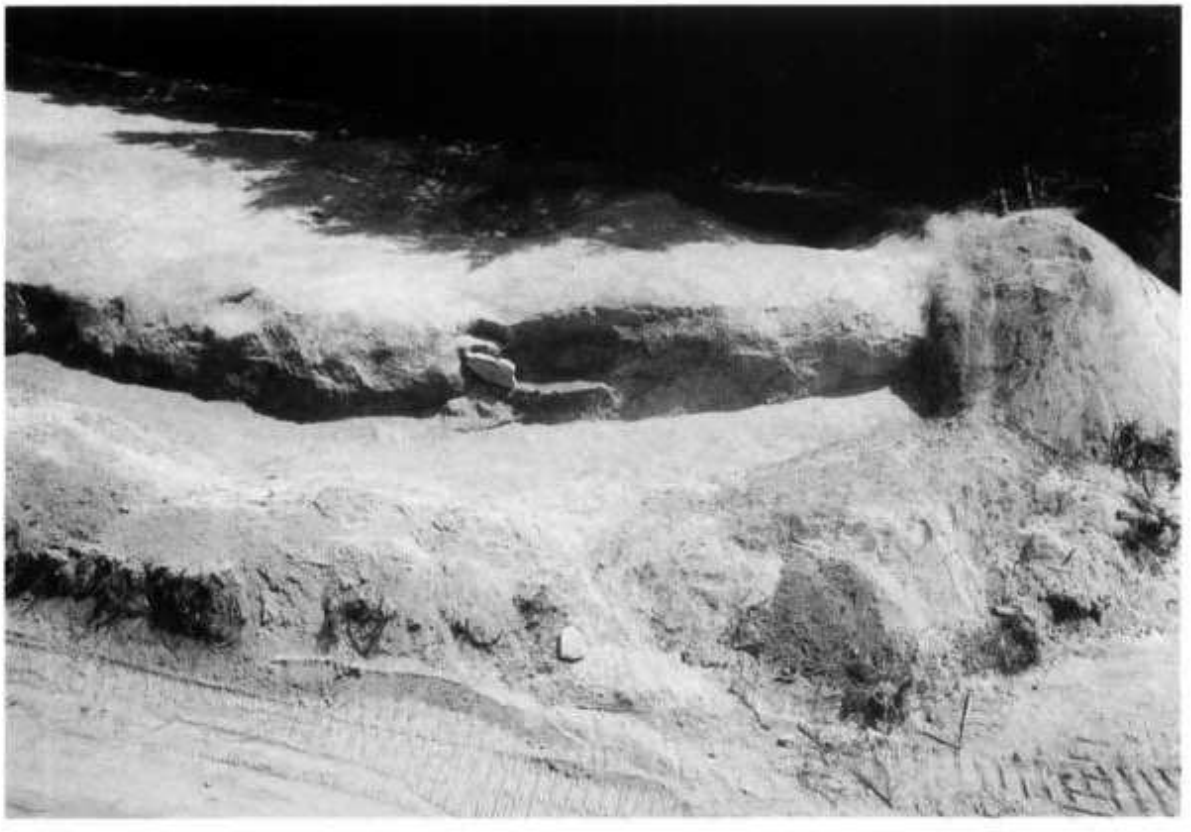
9号墳主体部

主体部断割状況

主体部鉄剣出土状況



10号墳全景（空中写真）



11号墳全景（空中写真）

10号墳主体部

10号墳主体部

10号墳主体部
石蓋除去後

5号墓他全景（空中写真）

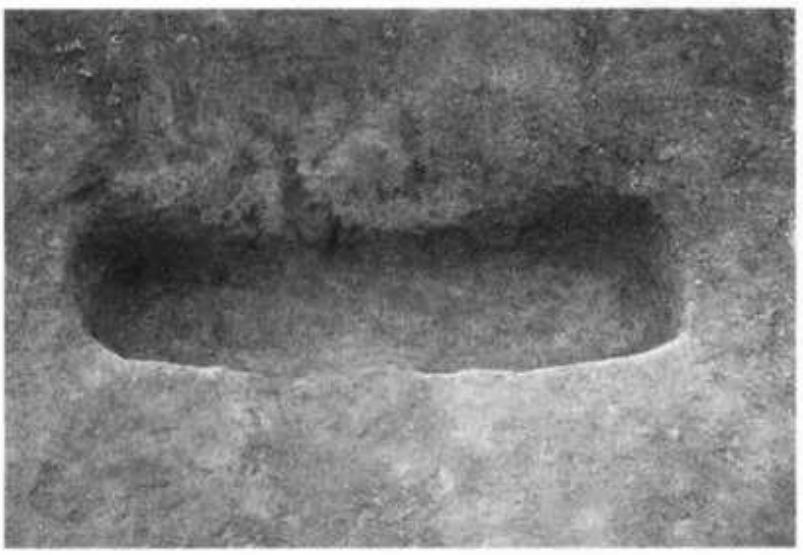
5号墓周辺全景（空中写真）

7・8号墓周辺全景（空中写真）

7・8号墓周辺全景（空中写真）

5号墓

6号墓



9号墓

7・8号墓遠景
（南東から）

7・8号墓近景
（南東から）

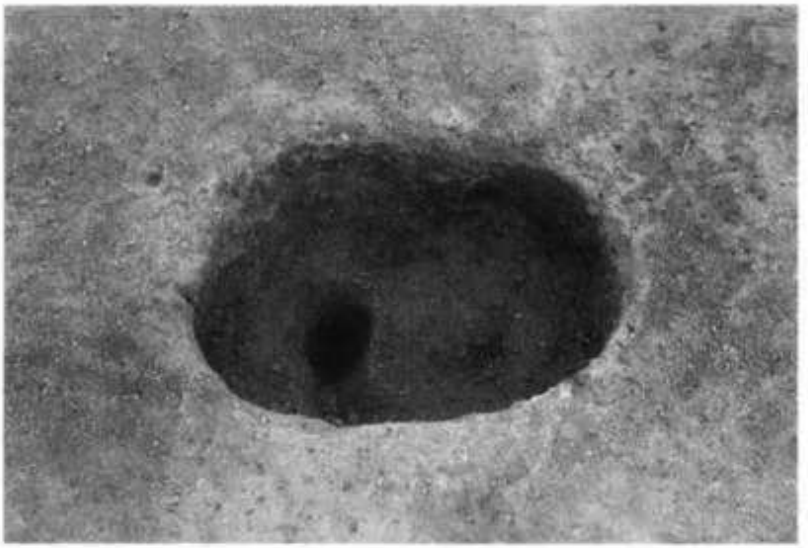
7・8号墓（空中写真）

7・8号墓
蔵骨器埋納状態
復原状況

10号墓
配石検出状況

10号墓
完掘状況

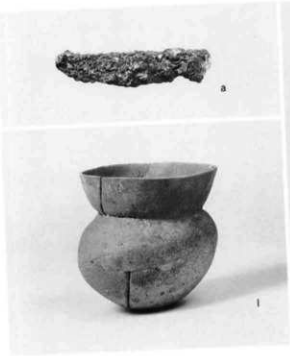
Pla. 14



2ST016

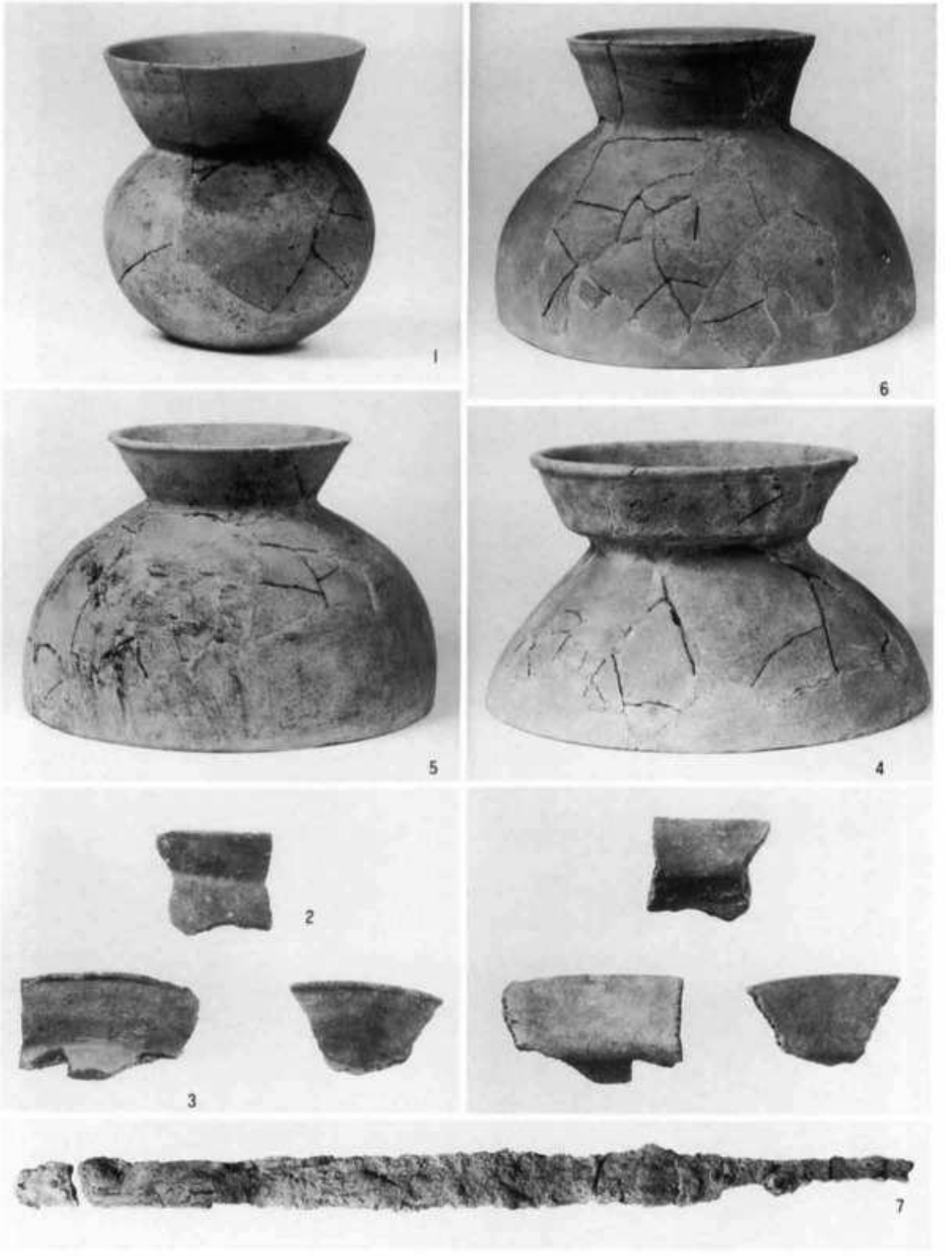
2ST040

2ST045



7・8号墳出土遺物

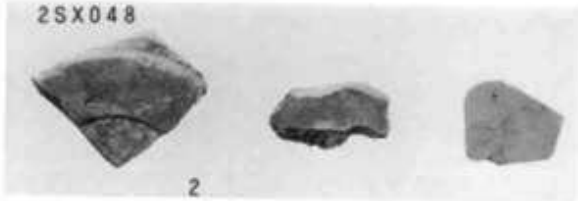
10号墳出土遺物

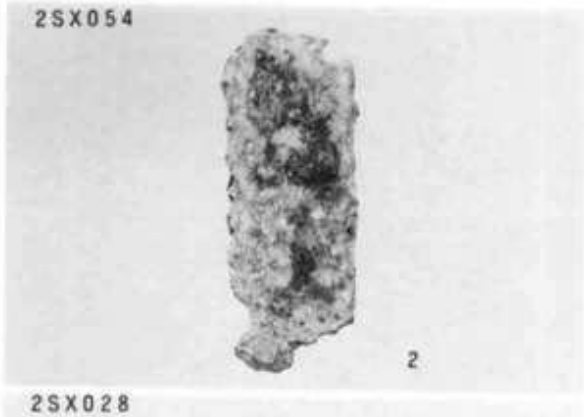


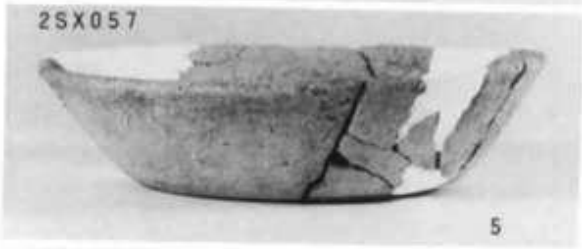
9 号墳出土遺物

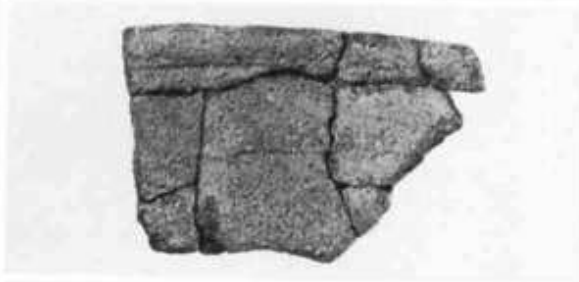
（左上から右下へ） 6号墓出土釘・6号墓出土玉・9号墓出土釘・9号墓出土刀子・8号墓蓋
7号墓蓋・8号墓蔵骨器・7号墓蔵骨器・10号墓上面出土坏

Pla. 18

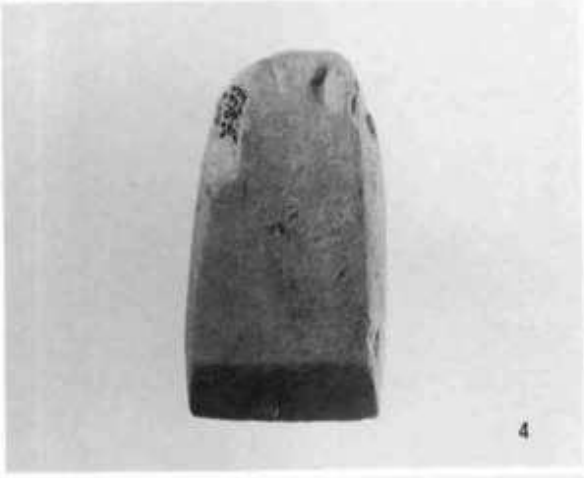








表土



◀ ▲各遺構及び表土出土遺物

宮ノ本遺跡 II
——古墳・墳墓篇——
太宰府市の文化財　第10集
1987.3.31
編集 太宰府市教育委員会
発行 太宰府市大字観世音寺86

印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31